

浄勝寺丹山文庫蔵「正法輪蔵」研究並びに翻刻

渡 邊 信 和

解 題

本書は、福井県丹生郡にある浄土真宗大谷派の浄勝寺に蔵する写本である。昭和五十八年三月の大谷大学名誉教授藤原幸章博士を中心とする同寺丹山文庫蔵本の整理調査⁽¹⁾の折、同朋大学教授織田顕信氏によって発見された。

筆者も、その年の夏継続していた整理調査に参加し、国文学関係の書籍の整理を手伝うとともに、本書の撮影、採寸など書誌を中心とする記録をとった。その後、虫損の補修などのため同朋学園佛教文化研究所に預けられたので、朱筆、胡粉による消字、また綴じ目に識された丁合などを詳しく調査し、ここに翻刻する運びとなった。

I

まず、本書の書誌を記す。

一、書名 「正法輪蔵」⁽²⁾

一、所蔵 福井県丹生郡朝日村下糸生

真宗大谷派 浄勝寺（上野達之住職）

一、写本 袋綴一冊

一、表紙 後補⁽³⁾ 薄茶紙表紙

一、寸法 縦二七・四 cm×横一九・三 cm

一、外題 表紙左上にうちつけに「正法輪蔵」とある。

一、内題 第一丁表中央に大きく「正法輪蔵」とある。この紙は、本文料紙と同じであるが、長く表紙となっていたらしく変色している。

一、紙数 墨付五五丁、遊紙なし、他に等大の紙一葉と、半切の紙二葉がはさみこまれていた。

一、書写者 順故（浄勝寺九代住職、寛延四・一七五二年没）

一、書き入れ等 本文には、

- (1) 朱による異本校合、勘案
- (2) 親本との校合による胡粉訂正
- (3) 墨による勘案

の三種がみられるが、いずれも書写者順故の手と認められる。

一、目録 第一丁裏に太子年次を示す。

一、奥書等 最終第五丁表に、著者に対する勘案と「北越丹生郡糸生村／浄勝寺順故」の署名がある。

本書は、かつて阿部隆一氏が「文保本太子伝」の一異本で、真宗に於て行なわれたものとされた「聖法輪蔵」の写本である。(以下本書を浄勝寺本と略称する。)⁽⁴⁾「聖法輪蔵」の現在知られている伝本は、大きく二つの系統に分けられるようである。牧野和夫氏がⅠ類とされた、満性寺本、慶応本及び満性寺本と深い関係にあると思われる法雲寺本と、Ⅱ類とされた光久寺本、東大寺本及び光久寺本のわかれと思われる聞名寺本である。⁽⁵⁾

浄勝寺本は、Ⅰ類に属する写本であり、近世中期の写本ではあるが、いままで全くなかった太子十一才の条や、Ⅰ類しかなかった太子二歳、十二歳、十四歳の各条がある事など、「聖法輪蔵」の研究に資することがあると思われる。

Ⅱ

浄勝寺本の本文を翻刻し、法雲寺本、満性寺本、光久寺本と対校してみた結果、以下のような事が知られた。

二歳の条(法雲寺本・未欠)では、法雲寺本が「是太子二歳」と表題をあげた後、冒頭に、

是太子二歳時、自胎内^ニ孕^ニ生^レ給^ヘ、^ニ積尊開^キ御舍利^ヲ給^シ御体也。

と絵相の説明文からはじめ、続けて、

年号^ハ金光四年^{歳次}癸巳春二月十五日事也

とするのに対し、浄勝寺本は、

年号^ハ金光四年^{歳次}癸巳春二月十五日事也。我朝無仏世界ニヲイテ、ハシ

メテ見仏聞法ノ両益ヲホトコシタマフ。

と、私年号から説きおこす。「聖法輪蔵」の本伝の各条に徴するに、「太子讃嘆表白」に続けて、

抑聖徳太子我朝御誕生之時代^ヲ相^ヲ尋^キ上古^ニ侍^レ、年号^ハ金光三年^{歳次}辰壬^ニ也。

とする太子一歳の条を除けば、いずれも「年号ハ……年……」と私年号から起筆する。⁽⁷⁾それに続く文には、その条の絵相を説明する文があったり、それがなく直ちに内容に入る条があったりするが、私年号から起筆することは統一されている。法雲寺本のこの条だけが異例なのである。あるいは、文保本太子伝から派生した「聖法輪蔵」が、その文章を整合

する以前のスタイルの名残りかもしれないが、「聖法輪藏」のスタイルとしては、浄勝寺本の方が整っていると云えよう。

また、太子の右手が誕生以来握られたままであったという記事に、

那羅延金剛力士モ、イカニモヒラク事ヲエス。始終コレヲニキリタマハ、モツテノ外ノ御カタハナリト、上下万人不思議ノヲモヒヲナシタテマツル。父ノ王、母ノ后モナヲサリナラサル御ナケキナリ。ウネメ諸卿ミナナケキヲモフトコロニ、

の文を加えている。これは、寛文六年板「聖徳太子伝」⁽⁸⁾巻一の太子二歳の条、

太子御たんじやう以後、すでに二歳にならせ給ふまで、右の御手をいまだひらきたまはず。

那羅延、金剛力士も、いかにもひらく事をえず、始終これをにぎり給はゞ、もつての外の御かたはなりと、上下万人ふしぎのおもひをなしたてまつる。父の王、母の后もなをざりならざる御なげきなり。うねめ、諸卿みななげきおもふところに、

と全く同じである。文を加えた例は、二歳のまゝとめに、

是ヒトヘニ末代凡夫悪人ニ、弥陀ノ本願ヲシラシメタマフ。仏名ニ三ケ伝アリ。口伝ヒトヘニ弥陀ノ名号アラハシタマフ也。

と、浄土教の側にひきつけている処にもある。

その他、一丁目表七行の和泉式部の詠歌とするものは、もともとは行間に書き込まれていた註文が本文に混入したものであると思われる。前行の朱

▲印(翻刻本文二歳註1)は、ここが親本の行がえの位置であり、本来はこの行間に記されてあった事を示すのであろう。同様に二丁目裏の最終行から三丁目表の七行目までに記される大論、涅槃経、大悲経、法華経の引文も、註文が本文に混入したものであろう。これらが、太子の南無仏称名にかかわるのではなく、手に握って生まれたと伝える仏舍利についての註文である事、後者はとりわけて仏舎利の安置された場所などでこそ有効な教説である事をみると、太子絵伝の絵解きにどのように利用したかは、疑問があろう。

三歳の条(法雲寺本・一部、満性寺本、光久寺本)では、一丁目表の十行、

私書入ル記月令曰、仲春之月始雨水。桃始花矣。陸佃埤雅曰、桃有三花之盛者、其性早花ニ於仲春ニ矣。宋奭衍義曰、山中一種桃。正合三月令桃始花者。花多子少。不堪啗矣。其花ノ紅ニシテ麗ヲ、女ノ年姿盛ナルヲ興ス。玄宗禁中千葉花盛開。帝与貴妃二日ヲ遂テ樹下宴。帝曰、独萱草忘夏ノミニ非ス。此花モ亦、能恨銷云ヘリ。天竺遺事二見

及び、三丁目表二行の一段下げになっている、

晋馬岌銘石壁。曰丹崖百丈。青壁万尋。其人如玉維国之深矣。尔雅曰、山崖之高曰巖矣。宋王賦曰、登巖巖而下望兮矣。祭文恭詩曰、連巖聳三百仞、絶澗臨三千丈矣。

は、光久寺本にもない浄勝寺本独自の異文である。前者は、その前後の

文、

爰以古詩云、源自周年一起テ流晋ニ一天。

及び、

大国、西王母申人此愛桃花、家廻四季（同時）頭、其中三千年一度花開実成植桃花、三度相見成得通之仙人、持三万歳之長命、待ケリ。因茲震旦之国王大臣、下至万民、同ク相迎、三月三日、桃花之宴被行、桃花翫日ニテ侍ヘリ。自レ此五節ハ始。正月元三・三月九日也。彼移ニ大国ノ風義、

七月七日・九月九日也。

自体が、法雲寺本、満性寺本の系統にはなく、光久寺本のみに存する桃花の宴と桃に関わる中国の伝承を記した註文的性格の文であり、光久寺本から浄勝寺本に到る過程に、誰かがさらに証文を付加したものと思われる。

十一歳の条は、他の「聖法輪蔵」諸本にない。末文の、

一切衆生ヲ、方便ヲ以テ弥陀ノ浄土引入センタメニ、如是神通ヲ現シ玉フ。

は、二歳の条の末文や、次の十二歳の条の末文と同じように、浄土教に引きつけた独自のものの可能性があろう。

十二歳の条（満性寺本）では、浄勝寺本は満性寺本とは異なり、百済国へ日羅を迎えに行く使者として、最初に紀伊国造押勝と吉備海部羽島の二名が渡海するも、百済国王が惜しんで許さなかったとし、再び羽島が一人で渡って、日羅に秘かに逢い、教えられた如くに強談判で将来に

成功したとする。満性寺本が、吉備海部羽島が、井北達という人物を迎えに渡った時、日羅も日本に渡りたいと同船したとするのとは、全く異なっている。満性寺本が人名とした井北達は、浄勝寺本では葦北ノ国ノ造達卒日羅と訂されている。この部分も、寛文六年板本は浄勝寺本と同じ説話をのせる。

浄勝寺本は、末文を、

日本ノ諸類ヲ方便シテ、阿弥陀仏城ヲクリ給カタメニ、師弟共アラハレ侍リキ。今ノ衆生念仏信スル身ハ、彼浄土ニ生レヌレハ、生々世々ノ事ヨクシル事六通ノ樂果ヲウル也。命ニカキリナク无量仏同位也。有難御事トモ也。

と結んでいるが、先の二歳、十一歳の条と同じである。

十三歳の条（満性寺本・巻首欠）では、浄勝寺本一丁目裏六行目からヨツテ蘇我ノ大臣信心専ニシテ三七日ノ間ノタマハク先生ニ衡山ヨリ多生ノ間仏法ヲ執行セシカトモ奇特アラハル、事マレナリ

とあるところは、「三七日ノ間」と「ノタマハク」の間に脱落があると思われる。満性寺本では、現存第二丁目表の第一行十三字目から、第三丁目表第二行まで、

（三七間）持済一食被三祈請一侍ケレハ

一粒ノ御舍利放ニ金色光明ニ忽然飯上飛頭給ヘリ

爰大臣感應不レ空一悦

一弁ニ舍利真偽一為レ除末代衆生疑一鉄質上奉置

以ニ鉄鎚ニ奉レ打ニ之ニ其鉄 質 鎚 悉雖ニ摧壞ニ御舍利不ニ毀ニ

或時御舍利鉄敷ノ中ツト入り、或時鎚ニ中雖ニ入給ニ仏舍利更ニ

摧給ハス弥放ニ光明ニ給ヘリ

此時大流ニ隨喜之涙ニ奉ニ納ニ瑠璃之甕ニ給キ太子拜ニ彼仏舍利ニ給仰ニ感

涙ニ告ニ大臣ニ(云)「傍線部寛文板本ナシ。」

と、字数にして百三十字程である。おそらくは、浄勝寺本の親本が一丁欠落していたものと思われる。同様にして、満性寺本巻首の欠落も、本文のみで浄勝寺本の六行、百五十七字分であるとすれば、これは、表題分一行を加えても、満性寺本の一丁分にはほぼ合致しよう。

浄勝寺本は、聖徳太子の乳母達の出家の記事で、太子による乳母の教化の経緯を詳しく記し、満性寺本が三人の尼の法名を示すだけであるのとは大きく異なっている。

十四歳の条(満性寺本)では、満性寺本が、障導神の化現した巫女の様子を、

年六十有余女 神子丙 文 唐絹赤 唐裳打着八尺紅 懸帶 皆水精
数珠懸ニ頸ニ紅 ノ扇 カサシテ

守屋の宿所に化来したと、詳しく記し、託宣でも、具体的に堂塔仏閣を焼き払い、仏像経巻を滅亡せよと指示するし、守屋が弟弓削小連の所に行つて託宣を伝える時も内容を詳しくしているのに対し、浄勝寺本は、障導神を神子の外にして守屋の宿所に遣したと記すのみであり、託宣の内容も、日本が神国であるとし、異国の神を崇めたため疫病をおこ

したとするだけであり、弓削小連に対しても「右神明ツケ物語シ侍」と簡略に記すのみである。

堂塔破却以後の記述は、異同がいちじるしいので、対校を示すと以下のようである。

浄勝寺本

堂塔ノ内ニハ大勢乱入シテ忝モ常住ノ仏菩薩ヲ取出奉ントスルニレイサウ盤石ノ如ウコキタマハス四面ヨリ火ヲハナシ天ニオホヒ霞ノ如ク焼アケ奉也

震旦日域三国相承ノレイ仏今ハ日本ノ機縁ツキサセタマヒケルカヤ東土ノ衆生シク縁ノアサキ事ヲモヒシラレタリ虚空ヲ飛鳥ハホノホニ羽ヲタレカナシミノ声ヲイタス陸地ヲハシル獸ハ猛火ニムカツテ涙ヲナカスマコトニ非常ノ草木迄モ皆カナシミノ色ヲアラハス傳灯聖徳太子本願ノ蘇我大臣兩人ノ御心中イカハカリ思召同ケムリトナ

満性寺本

其後滅ニ佛像経巻ニ堂塔ノ内 俗人多乱入 忝モ常住ノ仏菩薩ヲ取出ニ靈像如ニ盤石ニ不動 給ニケレハ寺 自ニ四面放ニ火ニ天蓋被ニ焼上ニケル有様即是。

リ行テツレナク残レル我身カナト
天ニアコカレタマヒケル是也

カノホノホノ上ノ空ニ一ノ寄特ア
リ万里ノ虚空ヲサシテミエアカリ
ケル猛火黒煙ノ中ヨリ金色ノ光ヲ
放テ虚空ヲ照シタマヘリ

諸アヤシミ見ニ釈迦弥陀ノ二尊ヲ
ノノ鳥瑟ヲナシテ月ノ初テ雲聞
ヲ出カ如光明ハナチテ虚空ニ飛ア
カリマシノテ彼御寺辺ノ池ニ入
水ヲモテニウカヒテトモニ立并給
ニケリ

時ニ太子蘇我大臣御覽アツテ五体
ヲ地ニナケ随喜ノ御涙ヲナカシニ
尊ノ利生猶日本ニトマリタマハ
ン事ヲヨロコヒタマヘリ

其時守屋兄弟二人家人イカリヲナ
シ忝生身ノ釈迦弥陀等ヲサンノ
ニアツカウシ奉ル其言葉云アヲキ
ネカハクハ我氏神符都大明神天津
神国ノ諸神トヲクハラヒタマヒト

爰有ニ一奇特ニ多由旬高モエア
カレハ猛火中放ニ金色光照ニ虚
空ニ給ヘリ

釈迦弥陀ニ尊各並ニ鳥瑟一月始
如レ出ニ雲間ニ光明耀飛出御彼
寺傍遷ニ難破之池水面ニ立並
給ケル御躰是也

太子蘇我大臣池辺有ニ御参ニ釈迦
弥陀ノ靈仏猶我朝御機縁渡セ給ケ
リト流ニ感涙ニ給ヘリ

時守屋大臣兄弟共彼池辺馳参
放大音声ニ悲目如來散々奉ニ惡
口ニ様
抑天下禍光物入ニ難破池ニ火不
レ焼水不レ沈猶為住ニ我朝中一口

ヨハハリケレハ彼釈迦弥陀ノ兩尊
水底ニシツミ黄金ノハタエヲカク
セリ是也

彼惡人同類共因果ニテ大瘡ノ病ヲ
得タリ

堂塔仏塔像經卷一爐ノ灰ト也其中
二百済国聖明王ヨリヲクリ渡タマ
フ一光三尊ノ如來火ニ入トモヤケ
ス水ニ入トモシツマスケカレス

惜日本神達國災遠弘失給ヘト
呼ハリキ

余時如來忽隱ニ黄金膚ニ沈ニ
水底ニ給ヘリ

上梵釈四天九億ノ天衆下堅牢地
神恒沙ノ眷屬口惜被ニ思食一ケ
レハニヤ虚空無雲車軸雨々大
風俄吹雷電ヲヒタシクシテ大
地動揺セリ

痛依ニ守屋逆罪無ニ咎ニ日本國
衆生等押並成ニ同類業一ケレハニ
ヤ七日七夜受ニ大瘡病一苦痛切己
侍リケレハ

忝太子成三悲一捧ニ香呂ニ祈請
御シケレハ七日申辰ノ一点病苦
忽平愈シ諸人悉助カリ侍リキ淺猿
カリケル逆罪也

時守屋大ニイカテ幾内五ヶ国ノ炭
ヲアツメ鍛治ヲヨヒフキテ七日七
夜ナヤマシ奉然トイヘトモ阿弥陀
如来ハ更ニ少モソシタマハス猶
光明ヲ放テ一里ノ内ヲ照シタマフ
守屋不及力難波ノ江ヘナケ入奉ル
此ノ日内裡金刺宮天ヨリ火フリ下
リヤキウシナヒ敏達天皇ノ内裡ノ
上ニ黒雲一村ヲヒテ其中ヨリ異
類異形ノ大鬼神等有テ高声ニヨハ
ッテ云ナンチ父欽明天皇仏法ヲ信
受セスシテ破（以下欠）

抑何ナル聖德太子御此無仏世界
出世奉ニ為興隆仏法利益衆生ニ磨
金銀交ニ朱丹鑲ニ摩尼木屑難
有建立給ケル仏法最初大伽藍
何守屋大臣住ニ邪見逆罪ノ心
重惡炎焼払片時間亦我朝亦被
成無仏世界ケルコソ口惜シカリ
ケレ

浄勝寺本の欠落部分は、先に見て来たように寛文六年板本と何らかの関

係が想定できるなら、寛文六年板本によって補ないうるのかも知れな
い。⁽¹⁰⁾ 寛文六年板本の当該箇所は以下のようである。

（さて日本国もこのことく無仏世界になりにけり。守屋がぎやくあ
くによつて）堂塔僧坊佛像経巻一爐のけふりと立のほり、（大小
権実の教文たゞ一時に灰となりをはんぬ。たゞし）その中に百済国
聖明王よりをくりわたしたる一光三尊の阿弥陀如来火に入ともや
けず、水に入ともしつまず、（地にうつめとも）けかれず。しかる
あひた、守屋おほきにいかつて幾内五ヶ国の炭をあつめて鍛治をよ
ひふきて七日七夜なやましたてまつる。しかりといへとも如来はさ
らにそんじたまはす。なを光明をはなつて一里のうちをてらしま
します。守屋ちからをよばず、本尊を難波のほり江へなげ入しづめ
たてまつる。この日内裡金刺宮天より火ふりくたつてやきうしな
ひぬ。敏達天皇の内裡のうへに黒雲一むらおほひて、その中より異
類異形の大鬼神等あつて、かうじやうによははつていはく、なんぢ
かち、欽明天皇仏法を信受せずして破（せしゆへに仏法擁護の諸天
その命をうはひ魂を三途にまよはしむ。いま又、仏法をはめつせ
んとす。しかればなんち命をたち内裡をやくべしとて、火雷火鬼以
下の靈鬼一同にこゑをあく。天皇すなはちこの日、御病つかせ給
ひて、つゐにほうきよなり給ふ。彼雲中のへんげの物のこゑをきく
ものは、ことくくまよひ、あるひはやまひつき、あるひは死す。
時の人おほきにおちをそる。しかりといへとも守屋が威勢にをそる

「ゆへに、なを仏法はめつのめんゑんをぞたくみける。」

とし、続けて「この一光三尊の阿弥陀如来は：」と善光寺如来の三国伝来の説話を記す。

三十一才の条（満性寺本、光久寺本）は、Ⅰ類とⅡ類とで、記事の配列が全く異なっている。

Ⅰ類は、

年号吉貴九年歳次壬戌 安芸ノ厳島ノ大明神ヲ始奉崇給ヘリ

としたあとすぐに、(1)「異説」として、太子廿一歳の折、厳島明神が初めて顕現したとする説をあげ、続いて、(2)安芸国司佐伯鞍職が厳島の西恩賀島の近くで龍頭の船に乗った貴女に逢い示現を蒙った事、(3)佐伯鞍職が上洛すると、示現の如く、(4)都に客星が出現し、数多の鳥が榊の葉を喰えて飛行し、(5)佐伯鞍職の奏上によって、(6)聖徳太子が示現した神の説明をし、(7)推古天皇も厳島明神を崇め、神領を寄進したとする。

これに対しⅡ類は、

年号吉貴九年歳次壬戌 春二月之比

に、(1)都に客星が出現し、数多の鳥が榊の枝を喰えて飛行し、(2)聖徳太子が神変を解くと、丁度、(3)安芸国司佐伯鞍職が上洛し奏上して、(4)恩賀島で貴女の示現を得たと云う。(5)太子はその貴女が沙渴羅龍王の息女であると説き、(6)推古天皇も厳嶋明神と崇め、神領を寄進したとする。

文保本太子伝（醍醐寺蔵）や満性寺本が編年的に事象を記述するため、年次の早い異説を最初に置くのに対し、光久寺本、浄勝寺本は、都

に於ける事象の展開に従って記述する。視点を聖徳太子のもとにすえた記述と云えよう。またⅡ類は、この後十月に本田善光が難波の堀江からいわゆる善光寺如来を取り出し、信濃へ下向した記事がある。¹¹⁾

卅六歳の条（光久寺本）では、光久寺本が五丁表第一行に、割註として震旦国の道名を挙げているのを、浄勝寺本は二丁裏第四行に本文に入れ込んでいる。ただし、光久寺本九丁表第五行の妹子が現地で聞いた里星を「太子御教付合セリ」と割註している処は、浄勝寺本四丁表第十行でも同様に割註としている。浄勝寺本は親本の表記を忠実に写しているかと思われ、浄勝寺本書写の時点で諸註文が本文に混入したのではないと思う所以である。いま一つ注目したいのは、浄勝寺本が巻末に、「正法輪蔵三十六巻 釈専空」と尾題を付している事である。浄勝寺本の祖本は、一卷一冊の「正法輪蔵」の形態の書であったと云えよう。

四十七歳の条（満性寺本、光久寺本）はⅠ類もⅡ類もごくわずかな違いを除けば、ほぼ同文と云ってよいようである。浄勝寺本巻末四丁裏からは、四十七歳条とは関係のない推古天皇の辞世歌一首と、太子五十一歳条にあるはずの太子と膳妃の間答歌八首、唐の吏高表仁の歌一首が記されている。これらは本来、太子十一歳条などの入紙と同様、口伝として伝えられたものが、そのまま記載されたものかと思われる。

四十八歳の条（満性寺本、光久寺本）も、Ⅰ類とⅡ類とは、前条よりは相違があるものの、取りあげる程の違いではない。浄勝寺本の祖本は巻末、太子の前生の物語の第五生の終りから、光久寺本七丁裏第四行以

下約三葉分が欠落している。光久寺本は以下のようである。

(然、後卅五、^{シテ}発心出家、住^{シテ}彼山、勤^{シテ}三行佛法、六十一歳)遷化。
第六生、相^ニ當陳末世、念^{シテ}禪法師云、又住^{シテ}彼山、勤^{シテ}三行佛法、数十年、
久修^{シテ}練行之功、畢^{シテ}生年六十二歳、示^{シテ}必滅、無常、終唱^{シテ}遷化、一侍。
如^レ是、吾身生^ニ世、無^ニ止事、修行^{シテ}佛道、得^{ヘテ}自然之智慧、悟^{ルコト}三
世事、悉^{シテ}是分明也。

朕最初発心之時、受^{シテ}持^{シテ}法華一乘、頓^ニ深禪定、悟^{レリ}法華三昧。過
去六生之利生方便如^レ斯。其後、震旦之機緣盡、日域來臨、用明王
皇為^レ父、忝^ニ宿^ニ人間人皇后御胎。成人自^リ廿二歳、當帝推古天皇被^レ
崇儲君、日本国我マ、ニ進退シ、國々在^ニ處々、建^ニ立^ニ四十六箇、之
大伽藍、弘^ニ置^ニ大小乘法門、化^ニ度^ニ一千三百余人之僧尼。

凡吾朝利生随分本懷、已雖^モ滿足、猶有^ニ懸^ニ心事。其故、我位居儲
君、普親^ニ付^ニ下賤者、利^ニ生^ニ之^ニ事本懷。吾入滅之後、經^ニ一百六
十年、必片土受^ニ下賤之身、普說^ニ如來之教法。此後今五百度生替、
弘^ニ佛法^ニ度^ニ衆生^ニ而已。

此依^ニ片土託生之願力、太子御入滅之後、相^ニ當^ニ一百六十年、光仁
天皇之御宇、宝龜五年、讀^ニ岐國多度郡有^ニ御再誕、成^ニ弘法大師、
四国片土之利^ニ益衆生^ニ給^ニへり。

實聖德太子大權聖者、受^ニ自在^ニ生^ニ給^ニツレハ、答^ニ片土託生之願力、同
時顯密祖師傳教弘法兩大師生替^ニ給^ニケル也。然則、同此依^ニ片土託生
ノ願、

太子御入滅之後、經^ニ一百三十年、人皇四十八代、稱^ニ德天皇御宇、
神護慶雲二年、人王五十代桓武天皇有^ニ御帰依、延曆九年建^ニ
立延曆寺^ニ給^ニへり。淳和天皇御時、天長十年六月四日、御年六
十五、遷化^ニシ給^ニへり。

膳后、太子六生御物語聞食^ニ申給、夫殿下之御物語、非^ニ妾所^ニ識。
但恨、今生之御機緣今不^レ幾奉^ニ別事、兼思^ニ悲歎^ニ之涙更不^レ留^ニ咽^ニ
御涙^ニ給^ニケル也。〔傍線部滿性寺本ノミ〕

以上、本文内容を概観して来たが、淨勝寺本を通して新たに考えられ
る事は、淨勝寺本はⅠ類に属する事、Ⅰ類は、寛文六年板本と何らかの
関わりがあると思われる事、淨勝寺本には、Ⅰ類に比して浄土教系の宗
旨にひきよせた記述がみられる事などである。

表記、用字をみると、淨勝寺本は、太子二歳、十一歳、十二歳、十三
歳、十四歳の各条は書き下し表記が多く、三歳、三十一歳、三十六歳、
四十七歳、四十八歳の各条は漢文訓読表記が多い。淨勝寺本目次の丁に
は、光久寺本と要安寺本の二種の伝本の存在を思わせる記述がある事と
考えあわせると、あるいは、淨勝寺本は各五巻ずつを有する二つの親本
をもって混成した本かとも思われるが、法雲寺本でも二歳の条は漢文訓
読表記、三歳の条は書き下し表記が多い傾向がみられるので、「正法輪
藏」の表記が一定していなかったと考えるのがよろしかろう。

淨勝寺本は、殆ど楷書体によって書かれているが、一部に草書様の書
体が見られる。それらについて光久寺本に検するに、光久寺本でもやや

くずされた書体の字が多い。また光久寺本の三歳の条は「給」を「詒」と誤記するが、浄勝寺本でも三歳の条の初出の「給」だけは「詒」が用いられている。しかし、光久寺本で「任」とはっきり判読できるものを浄勝寺本が「化」とし、「墓」を「基」とするのは、浄勝寺本が直接には光久寺本を承けていない事を示すものであろう。

III

浄勝寺本には朱筆の異本校合がある。この異本校合は、太子二歳、三歳、三十一歳、四十七歳の四条にしか施されていない。次表③の太子二歳一丁裏一行目の「刁」を訂した箇所は、「刁」が「寅」のあて字である事を知らなかった書写者順故が、右に朱で「寅カ」と勘案を記した後、異本と校合して「寅カ」の「カ」の字に重ねて「イニ」と記したものである。従って、勘案も、校合も共に順故の手による作業であり、順故が校合に用いた本文は四条しかない零本であった事が知られよう。校合の結果を以下に一覧する。

太子二歳

- | | | |
|-------|---------------------------------------|----------------|
| ①才7l | 昔モソウナ _レ サソナイニ | 法本文なし。 |
| ②同右 | 今モ双唱 _レ 調イニ | 法本文なし。 |
| ③1ウ1l | 刁ノトキ _レ 寅カ _レ 寅イニ | 法「寅」 |
| 太子三歳 | | |
| ④ウ1l | 乳母立 _レ 支ニイニ | 法、満、説話なし。光「友ニ」 |

太子三十一歳

- | | | |
|--------|--|--|
| ⑤2才5l | 奉 _レ 肝ニ未 _レ 然 _レ 方 _レ 来 _レ 之 _レ 御 _レ 德 _ニ 計イニ | 満本文なし。光「肝」 |
| ⑥3才2l | 不可 _レ 輕 _レ 神 _レ 域 _ニ 。社 _レ 頭 _レ 及 _ニ 末 _レ 代 _ニ イニ | 満・光「及 _ニ 末 _レ 代 _ニ 」 |
| ⑦3ウ1l | 在 _ニ 々 _レ 處 _ニ 々 _レ A _ニ 之 _ニ イニ B _ニ 之 _ニ イニ | 満・光「々」「々」「々」 |
| ⑧5才11l | 仰 _レ 願 _ニ 唯 _ニ 化 _ニ 佛 _ニ 意 _ニ 任 _ニ イニ | 満本文なし。光「任」 |
| ⑨5ウ4l | 有 _ニ 如 _レ 来 _ニ 。御 _レ 下 _ニ 信 _ニ 州 _ニ イニ | 満説話なし。光「信州」 |
| ⑩5ウ7l | 二 _ニ 月 _ニ 十五 _ニ 日 _ニ 早 _ニ 旦 _ニ 平 _ニ イニ | 満説話なし。光「平」 |
| ⑪5ウ8l | 下 _ニ 東 _ニ 土 _ニ 給 _ニ ヘト _ニ 。再 _ニ 三 _ニ 奏 _ニ 聞 _ニ ア _ニ リ _ニ ケ _ニ レ _ニ ハ _ニ イニ | 満説話なし。 |

光「再三奏聞アリケレハ」

- | | | |
|-------|---|------------|
| ⑫6才6l | 觀 _ニ 音 _ニ 一 _ニ 門 _ニ 聞 _ニ イニ (門の中に耳イニと記す。) | 満説話なし。光「聞」 |
|-------|---|------------|

太子四十七歳

- | | | |
|--------|--|----------|
| ⑬2ウ11l | 結 _ニ 決 _ニ 句 _ニ 文 _ニ 世 _ニ イニ | 満・光「甘」 |
| ⑭3ウ4l | 有 _ニ 徴 _ニ 妙 _ニ 之 _ニ 音 _ニ 少 _ニ イニ | 満・光「少」 |
| ⑮4ウ2l | 念 _ニ 佛 _ニ ナ _ニ サ _ニ レ _ニ タ _ニ 目 _ニ セ _ニ イ _ニ ル _ニ イニ | 満・光説話なし。 |
| ⑯4ウ10l | トミノ井ノ水スクヒテシ _レ トミノ井ノ水ノ心ハ世ヲスクフイニ | 満 (五十才) |

「トミノ井ノ水ノ心ハ世ヲスクフ」
光なし。

如上、対校本文も光久寺本系統の一本であった事、光久寺本そのものではなかった事が知られよう。浄勝寺本は、胡粉消のあり方をみると、行、字詰を除けば、字の大きさ、用字なども忠実に親本を写したと思われる。従って、浄勝寺本の親本は脱字、誤写などを含んだあまり良い本ではなかったと思われる。

これによって、「正法輪蔵」の写本として新たに、要安寺本(末見)⁽¹²⁾、浄勝寺本の親本、浄勝寺本の対校本の存在の可能性が考えられる。また「正法輪蔵」の筆者についても、順故の識語によって、親鸞の述作とする説が近世に行なわれていた事、真宗内での著述と前提していて、根拠は強いとは云いがたいが、順故は専空の述作と考えていた事などが知られる。

註

- (1) 調査の経緯は織田顕信氏「浄勝寺本『信海開書』について」(『同朋大学論叢』第五十号・一九八四年六月)を参照されたい。また、その成果の一部が、調査に参加された田代俊孝氏の「越前丹山文庫所蔵麗蔵校合黄檗版一切経について」(『印度学教学研究第卅卷第二号』)である。
- (2) 「正法輪蔵」の題については、阿部泰郎氏が「『正法輪蔵』東大寺図書館本」(『芸能史研究』第八二号・一九八三年七月)でその意味を考察されている。あるいは「聖法王」の「輪廻」の「蔵」なども考えられようが、ここでは原本の如く「正法輪蔵」をもって書名とする。

原本は虫損が甚しかったため、全丁を一度バラバラにして裏打を施し、あらためて天地を載ち、袋綴としたが、原綴をそこなうことなく、改装前と同寸になる様注意を払った。

- (3) 表紙右肩の「皇」は丹山順芸の整理による千字文で丹山順芸自筆目録百八十丁に板本の「伝暦」「太子実録」などとともに「皇写『正法輪蔵』」十巻一本とある。あるいは表紙を付けたのも順芸かと思われる。

- (4) 「室町以前成立聖徳太子伝記類書誌」(『聖徳太子論集』平楽寺書店、一九七一年十一月刊)

- (5) 牧野和夫氏「慶応義塾図書館蔵『聖徳太子伝正法輪』翻印並びに解説」(『東横国文学』第16号、一九八四年三月)

尚、「正法輪蔵」の諸本は、

川口久雄氏「越前丹生郡法雲寺所蔵『道士勝負記』とその絵解きについて」(『金沢大学法学部論集 文学篇』二二・一九七四年 月) 法雲寺本の一部

川口久雄氏「正法輪蔵」(『日本庶民文化史料集成』第二巻 三一書房一九七四年十二月刊) 光久寺本・聞名寺本

平松令三氏「聖法輪蔵」(『真宗史料集成』第四巻 同朋舎、一九八二年十一月刊) 法雲寺本の全部と満性寺本の殆ど。

及び前掲の阿部、牧野両氏の翻刻されたそれぞれのテキストがある。

今回の比較、引用にあたっては、同朋学園佛教文化研究所撮影のマイクロフィルム(光久寺本、満性寺本)、大谷大学図書館蔵の写真(法雲寺本)を用い、その他はそれぞれの活字に拠った。

- (6) 「正法輪蔵」には太子の伝記にあたる部分と附冊的性格の部分がある。本伝とは太子の伝記にあたる一巻から五十一巻を指す。ただし、今全巻がそろっているわけではない。

- (7) 「正法輪蔵」の用いる私年号については、小山正文氏「真宗と九州年号——『正法輪蔵』をめぐる——」(『市民の古代』第四集、一九八二・五)を参照されたい。

(8) 聖皇山頌受寺藏本による。詳しくは、拙稿「寛文六年板『聖德太子伝』とその絵伝」を参照されたい。

引用にあたっては私に句読点を施した。以下の諸本も同様である。

(9) 「文保本太子伝」(醍醐寺藏)では満性寺本と同じである。他の部分が説話の多少、文の配列の前後などであるのに対し、同じ事象を全く異なった説話として語る本巻は、Ⅰ類とⅡ類の関係を考える上で重要な意味を持つものと思う。稿を改めて検討したい。

(10) 寛文六年板本は、諸の「聖德太子伝」を寄せあつめたものであると思われる。この部分にはⅠ類の「正法輪藏」と同文的な部分も存するが、それらは寛斤の「聖德太子伝」にも存し、Ⅰ類の「正法輪藏」と寛文板本が直接に関係したかどうかは不明である。

(11) 川口氏は前掲「正法輪藏」の三十一歳条の注に「善光説話の五丁は錯簡で、もとは巻十四の一部であつたと思われる。」とされるが、善光が難波の堀江から善光寺如来を拾い出したのは、推古天皇十年の事(万徳寺藏本「聖德太子伝」四巻七ウ)とするので、この記事がここにあつても何ら不自然ではない。

(12) 現在、要安寺なる寺は見出せず、光久寺にほど近く、氷見市赤先に同じ真宗大谷派の養安寺がある。前註(7)の論文注にみられる養安寺がそれであろう。織田顯信氏の御教示によると同寺に問い合せられた処、現在は所有しておられないとの事である。

本論をなすにあたって、翻刻・研究の機会をお譲り下さった同朋大学織田顯信教授、調査・翻刻を御快諾下さった浄勝寺上野達之師に厚く御礼申し上げる。また、同朋大学の小山正文、小島恵昭両先生には何かと御教示を賜った。御礼申上げる。

凡例

翻刻にあたって以下の方針に従った。

一、本文一行を各一行にあて翻刻した。

一、用字は可能なかぎり原態に従った。誤用、衍字、脱字などがある場合もそのままとし、別にその旨を示さなかった。

一、基本的には通行の字体を用いた。ただし、いくつかの字は正字が用いられている場合には正字を用いた。

片仮名の複合字、キイトキ、ヒイトモ、ノシテ、コト、玉
フル下フルタマフなどはそのままとした。

一、本文には現行本文のみをあげ、朱書、胡粉消、重ね書き、傍書などはすべて注として各巻末に付した。

一、対校は予定していたが、紙面の都合で割愛し、主な点は解題で触れることとした。

一、片仮名の大きさであるが、本文漢字と同じ大きさの仮名と、振り仮名及びそれと等大の送り仮名があり、その中間の大きさの仮名もある。私に判断して、本文漢字と同じ大きさ、あるいは振り仮名と等大の仮名としてあつかった。基本的には書き下し表記の部分は本文漢字と同等に、漢文訓読表記の処は振仮名と同等に扱った。

一、本文はおよそ一行三十二字を越えないが、いくつか大巾に字数の多い行がある。その行は当然小さく書かれてあるので、例外としてそのように小さい活字で示した。

翻刻

皇

越前淨勝寺藏

正法輪藏

正法輪藏

太子二歳

同三歳

同十一歳

同十二歳

同十三歳⁽¹⁾

同十四歳

同三十一歳

同三十六歳

同四十七歳

同四十八歳

右五拾卷之内拾再を得たり

四十五卷⁽²⁾

起中飯久保村光久寺有

五卷者

同国土籠村要安寺有

淨勝寺丹山文庫藏「正法輪藏」研究並びに翻刻

(1) 「三」の下、胡粉で「四」を消す。

(2) 「五卷」は「卷者」に重ね書き。

(三) 初丁

是太子二歳御時

年号、金光四年^{庚辰}、春二月十五日事也我朝無佛

世界ニヲイテハシメテ見佛聞法ノ兩益ヲホトコシタマフ

太子御誕生以後ステニ貳歳ニナラセタマフマテ右ノ御手ヲ

イマタヒラキタマハス那羅延金剛力士モイカニモヒラク

事ヲエス始終コレヲニキリタマハ、モツテノ外ノ御カタハ

泉式⁽²⁾⁽³⁾⁽⁴⁾哥ニ南无佛ノ御舍利ヲ出スセツ鐘昔モソウナ今モ双唱⁽⁵⁾⁽⁶⁾

ナリト上下万人不思諸ノヲモヒヲナシタマツル父ノ王母ノ

后モナヲサリナラサル御ナケキナリウネメ諸卿ミチナケキ

ヲモフトコロニマコトニ御手ヲタマフ事ハ二月十五日ノ

早旦寅ノ時ナリコ、ニ守屋ノ姫玉照姫ノ錦ノ衾ノ

下ニ御寝ナラセタマヒシニ二月十五日アカツキ⁽⁷⁾ノトキニ

ハカニ御ネサメマシ、テ御妳母ニ物語シタマヘリ太子玉

照姫ニツケテノタマワクイカニ玉照姫ウケタマハレ阿児夜明⁽⁸⁾

ナハ吉方ニムカツテ心中ノヲモヒヲノヘントノタマフソノ時玉照

姫アナカシコ相サマタクル事ナカレカネテ御約束シ給フ御

妳母此旨ヲウケタマハリテ定シサイアルコトナリトヲモヒ

トガメ申様我君イマタヨウ地ニマシ／＼テ何夏ヲカ御心中
ニフカクヲホシメシ侍ルヤ明日吉時ヲエラヒテ吉方ニ向^{ムツ}テ御
披露アラン夏ミツカラワタクシニシテイカテカハウカクヲ
エラヒムカハセタテマツルヘシヤソウモンヲヘテ御ユルシヨラント申^{(9)*2}
サレケレハ太子此夏ヨシナシトヲホシメサレ胎内ヨリニキリテ

ニウ

(三ノ二)

〇

生給⁽¹⁰⁾御舍利ヲヲラキ佛ノ御名ヲトナヘテ初テ見佛聞法
ノ利益ヲ國ニ弘ント御心中ニヲホシメス御夏也天明^{ミツ}コノ
ヨシヒロフセハ觀念モ乱^{ミシマシ}惡カリナントヲホシメシ御言⁽¹²⁾ヲカヘマコ
トニソノ儀ユメ／＼アルヘカラスナンチモネイレ阿兒⁽¹³⁾モネイラント
御妳母ヲスカシネイリ給テ寅ノ時ノヲハリホトニ御メノトニ
シラセスヒソカニヲキ立タマヘリ即時^{ソトキ}ニ舍利ヲヒラキ佛名ヲ
トナヘテ我朝ニ佛法ヲヒロメントヲホシメシ御衣ナントヲメサレ
テハ妳母ヲキサハキ惡^{アツ}カリナント思召レ雪ノ御ハタヘヲアラハ
シタ、赤^{アカ}袴^{ハカマ}ノソハヲ踏テ東方ニ向テ立給フシカルニ誕生
已後ヒラキタマハサル右ノ御手ヲノヘテタナコ、ロヲ合タマヒテ
南无佛々々々ト高シヤウニ三遍トナヘタマヒテ合掌ノ

三オ

御手ヒラキタマヒケレハ釋迦如来ノ白玉^{ハツキョクサイシン}碎身ノ御舍利⁽¹⁵⁾
ヒカリヲハナツテ宮中ヲテラシタマヘリ御新殿ノ火ノカスカ

ナルニ舍利ノヒカリホカラカニカ、ヤキケル御躰是也御妳
母タチヲノ／＼驚立⁽¹⁶⁾ヲトロキサハキケル也玉照姫ヲトロキユハ
イカナル御事ソヤレイナラス夜中ニヲキ立マシ／＼テイカニ
ヤ我君昔ヨリイマタ聞タマハサルイマハシキ物ノ名ヲヨハセタ
マフコトヨト申ケレハ太子ウシロサマニ見返⁽¹⁷⁾御妳母ヲニラマ
セタマヒケル太子初テ无量劫ニモ難聞佛名ヲトナヘタマヒ
シヲイマハシキ物ノ名ヲヨハセ給ト妳母トノ申ケルカ謗法ノ
罪ヲエントイタハシクヲホシメシテカクニラマセタマヘルナリ
。大論曰碎骨⁽¹⁸⁾是生身舍利經卷是法身舍利也

(三ノ三)

〇

。涅槃經曰若善男子善女人深心供養於如来ニ興ニ深
心供養^{ユル}舍利^ニ功德正等無^{ナク}異^{ナリ}所得^{ユル}福聚无量無邊^{ナリ}
。大悲經曰我滅度後若有^テ人乃至供下養^{ヤル}我之舍利^ニ如^ニ
芥子^ニ等^ニ恭敬尊重謙下供養^{ヤル}我說是人以^ニ此善根^ニ
切皆得^ニ涅槃界^ニ盡^ニ涅槃際^ニ
。法華經曰諸佛滅度已供養^{ヤル}舍利^ニ者如^レ是諸人等皆已^ニ
成^ニ佛道^ニ矣

此舍利今ニ至テ法隆寺ニマシマス南無佛ノ舍利ト申寺
僧毎日諸演ヲコタラス梵唄伽陀ヲトナヘ称揚讚歎シ
奉^{ユル}出奉^{ユル}トコロ也マコトニ我朝ノ福田コノ舍利ト、マリ

三ウ

タル御事也

四オ

正身觀音我朝ニ人跡ト現シタマヒニ歳合掌ノ小兒ノ
跡ヲアラハシテ此國ニ初テ見佛聞法ノ利益ヲホトコシタマ
フ宮中ノ侍女采女ヲ初メトシテ无量億劫ニモ難聞佛ノ
名号ヲ耳ニ聞ク遠劫ヘテモアイ難キ白玉碎身ノ御舍
利ヲ凡夫ノ肉眼ヲ以テタチマチニ是ヲ拜見奉ルコト優
曇花ヨリモマレナル御事トモ也我朝ハ天神七代地神五代
合ノ十二代ハ神代ニテ数千万劫ヲヘテ佛法ノ名号ヲ不聞
神武天王ヨリ人王ハシマツテ廿九代マテナヲ日本ニ佛法
ヒロマラサリ然而ニ無佛世界ニ聖德太子トアラハレ初テ
佛法ヲヒロメタマフ也御舍利ヲサキトシテ佛法ノタツトキ
イハレヲアラハシタマフ抑二月十五日ハ六斎日ノズイ

(二ノ四)終

三

遮惡持善ノ良辰也ニハ本師弥陀——御エン日功德圓
満ノ日限也三ハ釋尊生死ノナカキ別ヲツケタマフ羽林ネ
ハンノ日也天地カンヲウシ諸天隨喜ノ日ニ相當テ大聖釋
尊ノ遺身ノ舍利ヲヒラキタマフ太子東方ムカツテ南無
佛トトナヘタマヒケル御事カタノモツテソノイワレ侍也昔天竺ノ
悉達太子ハ正覺ヲトケテ出世ノ本クワイハイタル法花ヲトキ

四ウ

タマヒシ時マツ東方ニムカヒ眉間ヨリ光明ヲハナツテ東方万
八千界ヲ照タマヒケリイマノ東土ノ聖德太子他生ノ本クワイ
ヲアラハシタマフ時モ東方ニムカヒ見佛聞法ノ兩益ヲホト
コシマシマス是ヒトヘニ未代凡夫惡人ニ弥陀ノ本願ヲシラ
シメタマフ佛名ニ三ケ傳アリ口傳ヒトヘニ弥陀ノ名号⁽²⁾ア
ラハシタマフ也

五オ

五ウ以下白

- (1) 「ツ」と「テ」の間に、朱「▲」印を記す。
- (2) 「泉」の右肩に、朱「▲」印を記す。
- (3) 「式」の下、胡粉で「或」を消す。
- (4) 「ト」の下、胡粉で「カ」を消す。
- (5) 「ソウナ」の各字左に朱点を記し、「ソ」の左肩から左に朱線を出し、「サソナ」と墨書。
- (6) 「唱」の左に朱点を記し、左下に朱線を出し「調」と墨書。
- (7) 「刁」は朱書。墨消の上に胡粉を塗り、その上に朱書。「トラ」の右にも朱書があるが、墨で消され判読不可能。その下方に「寅カ」と朱書し、「カ」の上から「イニ」と墨書。
- (8) 「テノタマワク」の下、胡粉で「マシ／＼テ」を消す。
- (9) 「ヨ」の下、胡粉で「ラ」を消し、右に「カノシアルヘキカ」と朱書。
- (10) 「御」の下、胡粉で「フ」を消す。
- (11) 「ヲ」から右へ朱線を出し、「ヒノシニテアルヘキカ」と朱書。
- (12) 「言」の下、胡粉で「コ」を消す。
- (13) 「阿」の下、胡粉で「何」を消す。
- (14) 「シ」の左に「聲」と朱書。

- (15) 「新」の左に朱点を記し、右に「寝ノニテアルヘキカ」と朱書。
- (16) 「ヲ」の左に朱点を記し、右に「オノシニテアルヘキカ」と朱書。
- (17) 「ス」の下、胡粉で「又」を消す。
- (18) 「ケ」は「シ」の上に重ね書。
- (19) 「別」の「ヲ」を胡粉で消す。
- (20) 「クワイ」の各字左に朱点を記し、右に「懷カ」と朱書。また「ワ」は「ハ」の上に重ね書。
- (21) 「ケ」と「傳」の間右に朱点を記し、右に「ノ、シ□ルヘキカ」と朱書。
- (22) 「号」の最終画虫損。右に「ヲノシアルヘキカ」と朱書。「号」と「ア」の間に朱点を記したのかも知れない。

- * 1 「開キ」脱か。
- * 2 「御ユルシニヨラン」あるいは「御ユルシヨカラシ」とすべき処。
- * 3 「——」は如来を略したものか、他にも十一歳条などに「童子」の略記がみえる。
- * 4 「ハイ」は衍字か。
- * 5 「采」を「末」の字に作るが訂す。

(三ノ初丁 中)

太子三歳御時

年号金光五年^{庚午}春三月三日桃花宴^{ヲトヨヒ}太子豊日^{トヨヒ}
宮蘭奉^レ成^ニ御行^ヲ桃花奉^レ見^シ詒處即是也^ヲ父天王并^ニ御^ス
母⁽¹⁾之后侍女采女其數多^ス引具^リ成^ニ御行^ヲ御有様是也^ヲ
抑三月三日之桃花浮^レ酒神^ニタムケ上^リ從^リ一人^ニ下^ニ至^ニ三万民^ニ

千^ニ秋万歳祝之物^{トモテ}祓^ハ像^ヲ侍^ス事^ヲ我朝始^ニ熊^ニ非^ニ自^ニ大國^ニ
事^ヲ起^ル事^ヲ共^ニ也^ニ其^ノ故^ハ昔^ニ震旦^ノ之^ノ周^ニ成^ニ王^ト申^ス帝^ノ御^ニ世^ヲ周^ニ
公^ト旦^ト申^ス臣^ト下^ニ帝^ノ奏^ス桃花宴^ヲ一^ニ年^ニ春^ノ秋^ノ兩^ノ度^ノ之^ノ有^ニ
御祝^ノ之^ノ會^ニケル^ニ也^ニ春^ノ桃^ノ花^ノ爰^ニ以^テ古^ノ詩^ヲ云^フ源^ノ自^ニ周^ノ年^ニ一起^ス
流^シ普^ニ一^ニ天^ニ一^ニ私^ニ時^ニ入^ル記^ス月^ニ令^ニ曰^ク仲^ノ春^ノ之^ノ月^ニ始^メ雨^ス水^ス桃^ス
始^メ花^ス陸^ノ仰^ニ埤^ニ雅^ニ曰^ク桃^ノ有^ニ二^ノ花^ノ之^ノ盛^{ナル}者^ノ其^ノ性^ハ早^ク花^ニ於^テ

仲^ニ春^ニ一^ニ矣^ニ宋^ノ夷^ノ衍^ノ義^ニ曰^ク山^ノ中^ニ一^ニ種^ノ桃^ノ正^ニ合^ニ三^ニ月^ニ令^ニ桃^ノ始^メ
花^ス者^ノ二^ノ花^ノ多^ク子^ノ少^ク不^レ堪^レ啗^ニ矣^ニ其^ノ花^ノ紅^クニ^ノ麗^クヲ^ノ女^ノ年^ノシ

姿^ハ盛^{ナル}ヲ^ノ興^スス^ニ玄^ノ宗^ノ帝^ノ禁^ニ中^ニ千^ノ葉^ノ桃^ノ盛^リ開^キ帝^ノ與^ニ
貴^ノ妃^ノ二^ニ日^ニヲ^ノ遂^ニテ^ノ樹^ノ下^ニ宴^ス帝^ノ曰^ク獨^ニ草^ノ忘^ル憂^ノノ^ニ非^ニス
此^ノ花^モ亦^モ能^ハ恨^ス銷^ス云^フヘ^リ事^ニ見^ル大^ノ國^ニ西^ノ王^ノ母^ノ申^ス人^ハ
此^ノ愛^ニ桃^ノ花^ヲ一^ニ家^ノ廻^リ四^ノ季^ノ頭^ニ其^ノ中^ニ三^ノ千^ノ年^ニ一^ニ度^ニ花^ノ開^キ
實^ニ成^ル桓^ニ桃^ノ花^ヲ三^ニ度^ニ相^ニ見^ル成^ニ得^ニ通^ニ之^ノ仙^ノ人^ト持^ニ二^ノ万^ノ歳^ノ
之^ノ長^ノ命^ト侍^ス因^ニ茲^ニ震^ノ旦^ノ之^ノ國^ニ王^ノ大^ノ臣^ノ下^ニ至^ニ三^ノ万^ノ民^ニ同^ニク

相^ニ迎^フ三^ニ月^ニ三^ニ日^ニ桃^ノ花^ノ之^ノ宴^ニ被^レ行^ス桃^ノ花^ノ既^ニ日^ニニ^テ侍^{ヘリ}自^リ此^ニ
五^ノ節^ハ始^メレ^リ正^ニ月^ニ元^ノ三^ニ三^ニ月^ニ三^ニ日^ニ五^ノ月^ニ五^ノ日^ニ彼^ノ移^ニ大^ノ國^ニ風^ノ義^ニ
我^ノ朝^ニ日^ニ本^ノ國^ニ三^ニ月^ニ三^ニ日^ニ此^ノ桃^ノ花^ノ祝^ノ物^ノ祓^ハ日^ニ自^リ昔^ニ至^ニ今^ニ

更^ニ無^ニ退^ニ轉^ニ一^ニ矣^ニ也^ニ故^ニ豊^ノ日^ニ尊^ニ聖^ノ德^ノ太^ノ子^ノ爲^ニ儲^ノ君^ト千^ノ秋^ノ万^ノ歳^ニ

玉牀安穩壽福長遠祝思食故宮後園御行桃花ヲ

太子奉^レ見給也^{名坂田} 既戸宮後父天皇左右之御

手松桃ニ之枝^{後園}タオリテ奉ニ太子ニ給トテ勅云松桃共

何祝者侍中何太子之御意御祝久物思食哉何^相

叶御心中ニ可^レ被^レ召勅給ケレハ太子捧ニ御手ニ取ニ松葉ニ給ケレ

ハ父皇子恠思食太子御心中奉^レ問給様夫相^レ當今日

一天學^〇悉桃花^〇既日也太子捨^レ桃花ニ取^レ松給哉其時太子

以^レ殊勝之明句ニ答奏給桃花是一旦ノ榮物也松葉又千

年朽木也皇子大奇又問^レ之言幼稚之心皆有^レ色香^〇既

愛^〇之世間尋之法ナ□ヤ太子其色紅句妙捨^レ桃花ニ愛ニ

松葉ニ給哉太子答云桃其色紅句雖^〇妙唯一旦榮物久友不

非松千年録色不^レ替故久爲^〇友也又云松葉雪中色深

霜下枝茂也因^レ之仙洞仙官以^〇松葉爲^〇禎木者婆秘

葉以^〇松脂爲^〇妙藥延齡之秘法變^〇老爲^〇若之祿木也云

然愚兒更不^レ耽^〇色香一獸^〇不^レ久物願^〇久妙之物也申給ヘハ

法花經目如來手以^〇摩^〇其頂矣

父皇子聞^〇食此言^〇阿尼之可^〇言非^〇吾可^〇識有^〇由歟大愛其悅

奶^〇經曰世尊在^〇衆中^〇金色臂^〇阿難頂矣

皇子抱^〇太子安^〇御膝上太子大恐畏奏言阿尼之入^〇御

手登^〇御膝^〇喻如下登^〇二百丈之巖^〇浮^〇千積之浪^〇大畏大花也

七〇

其故如何者人依^〇四恩^〇必雖^〇愛^〇生長之德^〇二儀骨肉之

恩甚勝也考^〇其廣德^〇高^〇於^〇大山^〇深^〇於^〇江海^〇報謝未^〇臻

恩^〇甚勝也考^〇其廣德^〇高^〇於^〇大山^〇深^〇於^〇江海^〇報謝未^〇臻

恩^〇甚勝也考^〇其廣德^〇高^〇於^〇大山^〇深^〇於^〇江海^〇報謝未^〇臻

恩^〇甚勝也考^〇其廣德^〇高^〇於^〇大山^〇深^〇於^〇江海^〇報謝未^〇臻

恩^〇甚勝也考^〇其廣德^〇高^〇於^〇大山^〇深^〇於^〇江海^〇報謝未^〇臻

恩^〇甚勝也考^〇其廣德^〇高^〇於^〇大山^〇深^〇於^〇江海^〇報謝未^〇臻

恩^〇甚勝也考^〇其廣德^〇高^〇於^〇大山^〇深^〇於^〇江海^〇報謝未^〇臻

恩^〇甚勝也考^〇其廣德^〇高^〇於^〇大山^〇深^〇於^〇江海^〇報謝未^〇臻

恩^〇甚勝也考^〇其廣德^〇高^〇於^〇大山^〇深^〇於^〇江海^〇報謝未^〇臻

恩^〇甚勝也考^〇其廣德^〇高^〇於^〇大山^〇深^〇於^〇江海^〇報謝未^〇臻

恩^〇甚勝也考^〇其廣德^〇高^〇於^〇大山^〇深^〇於^〇江海^〇報謝未^〇臻

恩^〇甚勝也考^〇其廣德^〇高^〇於^〇大山^〇深^〇於^〇江海^〇報謝未^〇臻

恩^〇甚勝也考^〇其廣德^〇高^〇於^〇大山^〇深^〇於^〇江海^〇報謝未^〇臻

恩^〇甚勝也考^〇其廣德^〇高^〇於^〇大山^〇深^〇於^〇江海^〇報謝未^〇臻

恩^〇甚勝也考^〇其廣德^〇高^〇於^〇大山^〇深^〇於^〇江海^〇報謝未^〇臻

恩^〇甚勝也考^〇其廣德^〇高^〇於^〇大山^〇深^〇於^〇江海^〇報謝未^〇臻

恩^〇甚勝也考^〇其廣德^〇高^〇於^〇大山^〇深^〇於^〇江海^〇報謝未^〇臻

恩^〇甚勝也考^〇其廣德^〇高^〇於^〇大山^〇深^〇於^〇江海^〇報謝未^〇臻

恩^〇甚勝也考^〇其廣德^〇高^〇於^〇大山^〇深^〇於^〇江海^〇報謝未^〇臻

恩^〇甚勝也考^〇其廣德^〇高^〇於^〇大山^〇深^〇於^〇江海^〇報謝未^〇臻

八〇

七ウ

高州高山之化導ヲト、メテ日本国ニ生ヲ王宮ニシメスヘシト
遺言セシカハ師之己生ヲ一目奉レ、拜願シカリニウクキスト
ナリテキタレリ昔ハ弟子ヲニ歎ヲト、メ今ハ又師ニ其歎ヲト、
メキ生死無常之習會者定離之理ヲシメシ給シカハ御
乳母友ナミタヲナカシ侍キ 又乳母ウクキスノナキ候ツレハ
君ノ仰ラレツルハ何更ニテ候ソヤト申侍シカハ太子答言此ハ一首

ハツ

三ノ四丁
歌也云^{*1}

ウクキスノ哥ハツハルノアシタニキタリ君ミレハアヒカワラサルモトノチカヒヨ
太子之御返哥ウクキスハムメカエニコソスミケレユメニモ君ノイロラムトデシ⁽¹³⁾
未代ノタメニ松子ノ大臣記ヲカレケル也此哥ノ心ハアラワニ侍リ⁽¹⁴⁾
夫我朝自ニ造化昔ニ至ニ仏法將來之今ニ国土無ニ佛法ニ故皆⁽¹⁵⁾
不レ升ニ善惡ニ悉不レ知ニ因果ニ然ニ天神地祇者有ニ權化深⁽¹⁶⁾
知ニ故觀ニ飛莖落葉ニ見ニ世間轉變ニ開悟解物ニ詠ニ春花⁽¹⁷⁾
秋月ニ知ニ物情ニ見ニ死此生彼ニ悲ニ世間無常ニ自ニ百王神武⁽¹⁸⁾
天皇即位ニ以來迄ニ欽明聖代ニ無ニ佛法ニ故刻ニ木結ニ繩集ニ⁽¹⁹⁾
砂ニ切ニ罪知ニ物數ニ解ニ日月遷流ニ夫以素盞鳥尊有ニ出雲⁽²⁰⁾
国流罪ニ之時八重村雲立⁽²¹⁾發ニ杜宮三天ニ着ニ之素盞⁽²²⁾

鳥之尊詠云八雲立⁽²³⁾出雲八重垣妻籠而八重垣作蘭⁽²⁴⁾

九オ

31

八重垣 此。和歌之寂初也五七五々句定始三十一字⁽³²⁾

之供基也神代有識故如レ此有深智又人皇之御代⁽³³⁾

賢王聖主内董自悟有ニ神通勝用ニ故百王之初神武⁽³⁴⁾

天王御時天王崩御之後年來被ニ思召ニ之采女奉レ忍ニ⁽³⁵⁾

御門ニ不レ耐ニ戀慕之悲ニ泣々到ニ猿澤池ニ投ニ身於池ニ成ニ底⁽³⁶⁾

澡ニ視之詠歌云⁽³⁷⁾和機母子之祚見多連髮於猿沢乃⁽³⁸⁾

池之玉藻土美流曾加那思喜⁽³⁹⁾故聖德太子飛花落葉⁽⁴⁰⁾

之假ニヨセテ本誓之悲願ヲアラワシ給ヘリ 抑太子此⁽⁴¹⁾

松梅ニ判ニ勝劣ニ給ニ御詞示ニ無常釈教之二門給也⁽⁴²⁾

凡無佛ノ世出世縁覺修行山林トレ居觀ニ世間無常⁽⁴³⁾

三ノ五丁

リ

爲ニ觀念之便ニ春花散⁽⁴⁴⁾風見覺ニ老少不定⁽⁴⁵⁾理秋⁽⁴⁶⁾
見ニ霜厄ニ知ニ生者必滅之謂ニ如期飛花落葉爲ニ觀念之⁽⁴⁷⁾
便ニ世間之生住果滅見ニ無常轉變ニ狀ニ生死願ニ菩提妙⁽⁴⁸⁾
果夫上宮太子本地救世觀世音無緣濟度慈悲被ニ催⁽⁴⁹⁾
假現ニ人跡ニ始來ニ此無佛世界ニ給ニ未ニ二三歳之兒ニ佛法思食⁽⁵⁰⁾
樣弘給依レ折隨レ物櫻梅桃季之假ニ默示ニ常住不滅之⁽⁵¹⁾
菩提妙果ニ給故桃花一旦榮物ニ程久友不レ待嫌給也⁽⁵²⁾
高野之弘法大師此松桃勝劣感シ坐テ以路者仁造給⁽⁵³⁾
ヘリサレハ彼色葉之内無常釈教四空之理侍色葉⁽⁵⁴⁾

之序題云倩案⁽⁴¹⁾奉^{アツ}上宮太子之三歳松葉桃花之
勝劣^ニ雖^ニ御躰^ハ小童之御形^也御心孝々^ハ顯^レ過去七佛

十オ

之御本意^ヲ給^{ヘリ}哀哉我等^ハ孝々タリトイヘ^ハ心小童ニ
オナシクシテ住^ニ名聞我^ニ不^レ致^ニ報恩^ヲ哉先師上宮太子之
松桃^ト勝判^レ我小童之學門之始^トシテ彼ワサヲ因縁^トノ
引導^{キントウ}小人^ヲ大ヤワラケ九轉之字ニナシ色葉ナツケテ六字ハ行ニツク
リ給^{ヘリ}無常之句云⁽⁴²⁾以^テ最者^ハ爲^ス保^ル
途登^ニ遠^ニ里^ニ怒^リ留^リ遠^ニ和^ニ駕^ニ與^ニ道^ニ津^ニ津^ニ那^ニ那^ニ等^ヲ

句也春花顯^ニ妙色^ニ苟^ニ四方^ニ董^ニ云ヘ^ハ散^レ風^ニ示^ニ老少不
定之理^ヲ秋^ノ月^ノ出^ニ三山^ニ葉^ニ光^ニ十^ニ方^ニ朗^ニ云ヘ^ハ隱^レ雲^ニ顯^ニ生者必滅
之謂^ニ如^ニ是有^ニ爲^ニ轉變^ニ遮^レ眼^ニ無常^ニ櫻梅桃季之假^{ナル}
ヨソヘテ書顯シ給^{ヘリ}釋教句云⁽⁴⁴⁾宇^ヲ乃^ニ於^ニ久^ニ得^ニ滿^ニ希

ま古江亭^ニ何^ニ沙^ニ歲^ニ遊^ニ免^ニ耳^ニ志^ニ未^ニ花^ニ蒙^ニ露^ニ辰^ニ之句也

十ウ

(三ノ六)

ス

有^ニ爲^ニ與^ニ山^ニ三^ニ界^ニ火宅^ニ无^ニ常^ニ轉^ニ變^ニ之^ニ人^ニ間^ニ之^ニ有^ニ様^ニ也^ニ誠^ニ天^ニ上^ニ
人^ニ間^ニ之^ニ有^ニ爲^ニ樂^ニ夢^ニ之^ニ世^ニ幼^ニ之^ニ間^ニ快^ニ樂^ニ之^ニ故^ニ淺^ニ夢^ニ喻^ニ一切^ニ凡^ニ
夫徒^ニ六^ニ道^ニ四^ニ生^ニ轉^ニ夏^ニ似^ニ无^ニ明^ニ酒^ニ醉^ニ而^ニ我^ニ等^ニ生^ニ淨^ニ土^ニ當^ニ開^ニ佛^ニ
覺^ニ再^ニ無^ニ明^ニ煩^ニ惱^ニ不^ニ可^ニ親^ニ愛^ニ以^ニ淺^ニ夢^ニ見^ニ志^ニ書^ニ顯^ニ給^{ヘリ}
山家之傳教大師カラサキノ松一乗之法ノ聲音ヲ止給^{ヘリ}

淨勝寺丹山文庫藏「正法輪藏」研究並びに翻刻

高野弘法大師三蜜⁽⁴⁶⁾之源流峯之小松アラハシ給^{ヘリ}此偏
上宮太子之三歳之御時ヲマナヒ給^{ヘリ}御事也故淨土宗⁽⁴⁷⁾松
葉桃花之御勝判^ハ聖道門淨土門之二門ト判スル也聖德
太子常云ク南天^ニ祖師^ニ引^ニ佛^ニ法^ニ爲^ニ二^ニ謂^ニ教^ニ内^ニ教^ニ外^ニ是^ニ也^ニ
即如来^ニ正^ニ法^ニ望^ニ口^ニ爲^ニ教^ニ望^ニ心^ニ名^ニ禪^ニ南方^ニ惠^ニ觀^ニ引^ニ一^ニ代^ニ
聖教^ニ爲^ニ五^ニ時^ニ光宅寺雲法師立^ニ四^ニ教^ニ判^ニ聖^ニ教^ニ空^ニ朝

十一オ

曇鸞法師立^ニ二^ニ教^ニ一^ニ弘^ニ教^ニ口^ニ如^ニ是^ニ三^ニ師^ニ本^ニ大^ニ聖^ニ文^ニ殊^ニ之^ニ門^ニ
人也ト言ヘリ夫以^テ諸佛出世本懷阿彌陀仏名爲説云々⁽⁴⁸⁾

然上宮太子本地觀音之垂跡御坐間常念我本師阿
彌陀佛誦^ニ即^ニ以^ニ此^ニ思^ニ奉^ニ松^ニト^リ給^{ヘリ}御事偏念佛之勝因
事ヲアラワサンカメ也貫^ニ之^ニ奉^ニ取^ニ松^ニ葉^ニ致^ニ三^ニ不^ニ心^ニ云^ニ久^ニ友^ニト^リ思^ニ
食^ニ桃^ニ花^ニ可^ニ取^ニ給^{ヘリ}夫松木千年之植木桃万年之吉木也⁽⁴⁹⁾

西王母九千歳之春秋ヲオクリシモ偏桃花之ユヘ也爲^ニ此^ニ不^ニ審^ニ
之^ニ兩^ニ枝^ニタ^ニオ^ニリ^ニテ^ニ一^ニ首^ニ之^ニ哥^ニマ^ニキ^ニテ^ニ住^ニ吉^ニ大^ニ明^ニ神^ニ御^ニ寶^ニ前^ニ二^ニオ^ニク^ニ
千^ニ歳^ニ經^ニテ^ニサ^ニテ^ニ其^ニ後^ニハ^ニイ^ニカ^ニセ^ニン^ニ春^ニ盡^ニセ^ニス^ニハ^ニ花^ニハ^ニサ^ニキ^ニナ^ニム^ニ
七^ニ日^ニ之^ニ滿^ニ夜^ニ明^ニ神^ニ之^ニ御^ニ返^ニ哥^ニ
千^ニ歳^ニ經^ニ松^ニ我^ニ瓶^ニ花^ニア^ニタ^ニナ^ニリ^ニ散^ニリ^ニテ^ニ失^ニレ^ニハ^ニ

十一ウ

三ノ七丁終

ル

然者明神上宮太子在世ニ松葉ヨリエテ法味ヲ持御坐^レ御
夏ヲ覺出^テノ御哥哀貴^ム 御夏共也 一条院御時正曆
五年三月十五日 住吉明神託宣云昔神功皇后之御時討^シ
新羅^{（52）}時我大將軍也日吉副將軍也 朱雀院之御宇
承平年中打^シ將門^{（53）}之時日吉大將軍也我副將軍也日
吉爲^ニ大將軍^一夏桓武天皇之御宇傳教大師自^リ結界^{（54）}自^リ成^{（55）}
一乘峯^{（56）}以來喰^リ受^テ 法味故也我可^レ増^ス威光^{（57）} 弥陀之無上
法味ヲソナウヘキ也ト御託宣アリシ時ヨリ月之十五日十六
日ハ不断念佛始^キ 抑住吉明神上宮太子御契約
アリテ千年之松ニヨリエテ弥陀之名号ヲアラハシ給ヘリ貴
哉二千余年之昔中天竺^{（58）} 顯^{（59）}二界之獨尊釋迦牟尼如来^{（60）}

給^ヘ 當来之世経道滅盡我以慈悲哀愍特留此經止住
百歳ト説^キ 哀愍ヲタレマシ^{（61）}テ弥陀之名号ヲ止メ給キ
哀哉我朝^{（62）} 上宮太子ト示シ坐^テ飛花落葉^{（63）}諸
行トキラヒ松葉ヲ名号ヨソエテ人数十歳マテ衆生
ヲ利セントオホシメシテ弥陀之名号ヲアラハシ給ヘリ

十二オ

十二ウ以下白

- (1) 「之」の下、胡粉で「后」を消す。
(2) 「レ」点は「ニ」点の上に重ね書き。

- (3) 「此」の下、胡粉で「五」を消す。
(4) 「歳」はもと「歳」とあった「ノ」を胡粉で消し、右に「マテ」と墨書。
(5) 「左」の下、胡粉で「右」を消す。
(6) 「オ」の下、胡粉で「ワ」を消す。
(7) 「哉」の下、胡粉で消字したと思われるも字不明。
(8) 「奏」の右、送り仮名「フ」を胡粉で消す。
(9) 「殿」と「ニ」の間に朱点を記し、右に「ニノ字アルヘキカ」と朱書。
(10) 「諸養」のそれぞれの字の左に朱点を記し、右に「初」「陽」と朱書。
(11) 「立」の右に「支^{（イ）}」と墨書し、さらに、右に「トモカ」と墨書。
(12) 「竹」の下、胡粉で「彼」を消す。
(13) 「哥」と「ハ」の間に朱点を記す。
(14) 「ハ」と「ア」の間に朱点を記す。
(15) 「哥」と「ウ」の間に朱点を記す。
(16) 「レ」と「ユ」の間に朱点を記す。
(17) 「ヲ」の下、胡粉で「シ」を消す。
(18) 「哥」の字、何らかの字に重ね書きをしたと思われるも、字不明。
(19) 「ワ」の下、胡粉で「ハ」を消す。
(20) 「悉」の下、胡粉で消字したと思われるも字不明。
(21) 「武」の下、胡粉で「代」を消す。
(22) 「重」の下、胡粉で「雲」を消す。
(23) 「素盞」の右、それぞれ「ソ」「サノ」と読みを朱書。
(24) 「鳥」の右、「オノ」と読みを朱書。
(25) 「尊」の右、「ミユト」と読みを朱書。
(26) 「八雲立出雲八」の右それぞれ「ヤ」「クモ」「タツ」「イツ」「モ」「ヤ」と読みを朱書。

- (27) 「重」の右、朱の振り仮名があったものと思われるが虫損。
 (28) 「垣妻籠而八」の右、それぞれ「カキ」「ツマ」「ユメ」「テ」「ヤ」と読みを朱書。
 (29) 「重」の右、朱の「へ」の振り仮名があったものと思われるが判読不可。
 (30) 「垣作蘭」の右、それぞれ「カキ」「ツクル」「ソノ」と読みを朱書。
 (31) 「八重垣」の右、それぞれ「ヤ」「へ」「カキヲ」と読みを朱書。
 (32) 「五」と「々」の間に朱点を記し、右に「七、字アルヘキカ」と朱書。
 (33) 「ケ」は、「ノ」の上に重ね書。
 (34) 「云」と「和」の間に朱点を記す。
 (35) 「池」の上欄に朱点を記す。
 (36) 「喜」と「故」の間に朱点を記す。
 (37) 「ワ」は「ハ」の上に重ね書。
 (38) 「願」の右下、胡粉で「ノ」を消す。
 (39) 「提」の下、胡粉で「薩」を消す。
 (40) 「仁」の右に朱点を記し、右に「三」と朱書。
 (41) 「子」の下、胡粉で「リ」が消す。「師」を書こうとしたものか。
 (42) 「リ」と「無」の間に朱点を記す。
 (43) 「云」と「以」の間に朱点を記す。
 (44) 「リ」と「釋」の間に朱点を記す。
 (45) 「為」の下、胡粉で「有」を消す。
 (46) 「蜜」の下、胡粉で「密」を消す。
 (47) 「故」は何らかの字の上に重ね書きするも、字不明。
 (48) 「諸」の右に「秘蜜経云」と墨書。「云」の下、胡粉で「目」を消す。
 (49) 「三」点の下、胡粉で「レ」点を消す。
 (50) 「シ」と「春」の間に朱点を記す。
 (51) 「瓶」と「花」の間に朱点を記す。
 (52) 「時」の下、胡粉で「我」を消す。
 (53) 「副」の第二画、「一」となっていたものを、「口」と朱で訂す。

浄勝寺丹山文庫藏「正法輪藏」研究並びに翻刻

- (54) 「将門」の右、それぞれ「マサ」「カト」と読みを朱書。
 (55) 「エ」の下、胡粉で「テ」を消す。

* 1 この丁に半切の入紙あり。

「うくひすのうた

初陽毎朝来不相還本栖

はつはるのあしたことにはきたれとも

あはてかへるはもとのやしろえ

此詩歌今、近

* 2 この丁に半切の入紙あり。

「采女謡雨の口口」雨天字近

わきも子かねくたれ髪を猿沢の

池の玉藻と見るそかなしき

此歌

* 3 「タ」脱カ

* 4 「ヨリエテ」は順故の披見した親本が、「ヨソエテ」を誤写したものと思われる。

(十一) 初子

ヲ

太子十一歳御時

高田専修寺

年号、敏達天皇十一年^{壬戌}春二月ノ比、大和國高市郡難波

銀ノ池ノ北ナルニ小林ノ蘭ノ中ニシテ三十六人ノ童子ヲ

引卒シテサマノ御勝負アリ初ニハ武藝ノ道ヲ教

タマヘリ是ヲ弓石ノ遊ヒト名、太子諸ノ童子ニツケテノタマハク

抑日本ハ神國ニシテ人ノ心カシコクハカリ⁽¹⁾莫餘國ノ人ニスクレ
タリ男子ノ身モツトモ諸道ニ於テケイコアルヘキ也別⁽²⁾テ文武ノ
二道ハ定恵ノ二法也文道ノ教ヲ知ル物ハ君ノタメニ忠ヲイタシ
父母ノ為ニ孝ヲアツク天下ノ政道ヲハキマヘ万民ヲ撫育シテ
ソウシテコト／＼ク仁義礼智信ノ五常ノ道ヲソナヘリ今日吉日ナリ
マツ武藝ノ道ヲケイコスヘ⁽³⁾カノ薬師ノ十二神将千手ノ二

十三オ

十八部衆トハ皆往古ノ如来久成ノ薩埵也各隨類應
同ノ日ハ忝モ柔和忍辱ノ跡ヲアラタメ弓箭ヲ持物トシテ
刀杖ヲ執持シテアクマヲカウフクシタマヘリ云ムヤホンフニヲキテ
オヤ此道カケテハイカテカ怨敵ヲタイラケ國ノ凶徒ヲシツム
ヘキト太子ミツカラマツ弓ヲ引矢ヲ放タマフ也昔震旦ニ聞
養由力術ヲツキ千度放百度ハナチタマフ御矢オホシメス矢⁽⁴⁾
ツホモ更ニハツル、哀侍ラス次ニ石ノ御遊ト申ハ囲碁双六ノ
ウヘノ遊ヒ也加様ノ石ノアソヒニヲイテ太子コト／＼ク通達シ給
ヘリシカノミナラスイサコヲアツメ文字ヲカキ付テオホクイサコ
トモヲ打混シテ片時ノアヒタニ文字ノ次第ヲエラヒアハセテコレ
ヲ順⁽⁵⁾次第ニコト／＼ク讀連タマヘリ故ニ彼ノ御弓ノ遊此石ノ

十三ウ

十一ノ三丁

乙

遊トモヲ弓石ノアソヒトナツケ奉ル也此外又詩歌管絃等ノ

御夏ハ中々申ニ不⁽¹⁾及一切ノ諸道ニヲイテ文武兩藝ヲキハメ給⁽²⁾
サテ悉達太子提婆達多ニタイシテ后ノアラソヒニサマ／＼ノセウ
フヲナシ給ヒシ時御弓ノセウフ侍リケル時ニ祖父師子頻王ノ御
弓五百人シテ張ケルヲメシ出サレ十六歳ノ御時一人シテ是ヲハリ
ツルウチシ給ニケルヲト上⁽³⁾梵天ニ聞引ハナシタマフ御矢アヤマタス
クロカネノアツサ三尺ノ的七ノ鼓ヲ射トヲシナヲ大地ノソコニ十
六万由旬金輪際マテ射通シタマヘリ今我朝ノ聖德太子モ

又以テ如⁽⁴⁾是諸⁽⁵⁾童子ヲトモナヒタマヒテ種々ノ勝負ヲケツシ給
ヒアルイハスマフヲトツテカツ事ヲ得アルイハ作馬ニムチヲウツテ遠⁽⁶⁾
陸地ヲハシリシカウシテ後万里ノ虚空ニ至リ雲ヲフミハケ

十四オ

霞ヲ分空中ニ行住座臥シ飛行自在ヲホトコシ給ヒケリ
大聖大權ノ御フルマヒナレハ初テ驚ヘカラストイヘ⁽⁷⁾臣隨類
應同ノ前ニハ不思議ナリケル御事也カヤウニ武藝ノ
御遊⁽⁸⁾ヲハナツテソノ後チ又文藝ヲ教タマヘリ其時ニ太子ノ御
兄弟ノ王子達ナラヒ二人々ノ公達ソウシテ卅六人童子等⁽⁹⁾ニ
御ヤクソクアツテヲ／＼一切ノ難字ヲソロエテサカフコトバトモヲ書⁽¹⁰⁾
集テ面⁽¹¹⁾ニ一卷ノ物トモサヘケ同時ニヨミアケテ太子ニトヒ奉ル片
卅六人童子太子ヲ中ニスヘ奉テ八方ニ立ツラナリ同時ニコユヲ
アケ呉⁽¹²⁾口同音ニヨミアケ侍リケルヲ太子イツレモコト／＼ク
キコシメシ分タマヒケリソウシテ天竺震旦日域三國相承

シテツタウル彼文字ノヨミヲ一々明白ニ流水ノコトク弁舌ト、

十四ウ

（十ノ三）

カ

コホリナクコタヘ給ケリ如レ此連日ノ御セウフ太子ニヒトシキ人

更ニマシマサス^{（9）}卅六人童子ノ御交名ヲ末代ノ為ニ大和国法隆

寺ノ講堂ノカヘイタニ太子御自筆ニカキツケ給ヘリ

摩呂子親王 筒嶋王子 久目王子 小林王子^{（10）}

大原王子 小嶋王子 雲見王子 難波王子

早米王子 石見王子 是ハ皆太子ノ御兄弟并御

一門ノ王子也達次又卿上雲客ノ君達交名等カキツラネ給ヘリ

嶋角童子 小嶋童子 早走^{（11）} 鬼勝^{（12）}

岩手 月影 檜隈 小松

山路 坂住 走出 橘木

弓取^{（12）} 早目^{（13）} 足輕^{（14）} 鳥羽^{（15）}

十五オ

綱手 片山 遠山 高松

鬼取 葛木 十市 田邊

犬養 馬耳^{（16）} 上三十六人也

抑此卅六人ノ童子達ミナ是大聖權者久位通達ノ大菩

薩等也シハラク主伴利生トナリ太子トクヲアラハシタマヘリコ、

ヲ以テ比叡山ノ曇祖慈覺大師聖德太子十六歳ノ

浄勝寺丹山文庫蔵「正法輪蔵」研究並びに翻刻

御影ヲ自エカキタマツリ御供養ヲノヘ給ヒケル時ノ嘆徳ノ

文ニ云、忝キカナヤ上宮太子生年十一歳諸ノ童子ト弓

石ノアソヒヒソカミヲモン見レハ三十七尊ノ隨類應同ノ利生

ヲメクラシタマヘリタツトキカナ厩戸王子御年十六歳ニシテ守

屋ノ逆臣ヲ誅セシメ給フツラノヲモン見レハ又十六大菩薩同行

十五ウ

（十一ノ四）

コ

證入ノ徳ヲ表シ給ヘリ 蓮花三昧經文云、歸命本覺心

常住妙法蓮臺^{（18）} 本来具足三身徳 三十七尊住心城

普門塵數諸三昧 遠離因果法然具 無邊徳海本圓滿

還我頂礼心諸佛ト此ノ經ノ文ニヨツテ慈覺大師聖德太子

ヲ嘆徳シ奉タマヒケル也但此太子十一歳ノ御時ノ弓石ノ

アソヒ卅六人ノ童子ハ一會ノ所化ヒナリ能化ノ聖德太子

ヲ加エ奉卅七尊ニ帰シタマヘリ如レ此連日ノ御遊ヒヲ父ノ用

明天皇コカケニ立シノヒテ御エイランアツテ宮ニ還御ナリテ

后ニツケタマハクソレ我厩戸王子年々歳々日々夜々ノ御

フルマイ耳目ヲ驚シ奇特マコトニ種々ナリトイヘヒコノホトノ

連日ノ御ヒ遊ハ心言葉モ不レ及一箇ノ中ニ卅六人ノ童

十六オ

子八方ニタチ唱^{（19）} 可ノ言葉ヲ同時ニコトノク聞分タヘヘリ

今日ヨリ我カ太子ヲハ八耳皇子トナツケ奉ヘシ太子十一

一二三

歳ノ御時ヨリ又用明天皇ノ勅定ニテ八耳皇子トナツケ奉給ヒケリトヲ^{*6}天竺ヲタツヌレハ釋尊ノ在世十第子其隨一目連尊者ハ天耳自在ノ德ヲソナヘタマフ阿那律尊者ハ天眼自在ノ德ヲソナヘタマヘリ今我朝ノ聖德太子ヲトラセタマハスチカク震旦ヲトフラヘハ漢家ノ天子初テ第三代黃帝ト申ケル国王ノ御代二十人ノ臣下アリ釋尊ノ十大弟子ノ如各皆一德々々ヲ身ニ具シ侍リキ彼黃帝ノ十人ノ臣下ニ離朱⁽²²⁾伶倫トテ二人ノ臣下カ有離朱ト申シケル臣下ハ天眼自在ニシテ阿那律尊者ノコトクマナコ明ナル

十六ウ

(十一ノ五丁終
德ヲソナヘ居ナカラ千里ノ外ニ蚊片股ノ万丈ノ木ノ空ヨリヲチタルヲアキラカニ是ヲ見ル伶倫⁽²³⁾申臣ハ又天耳自在ニシテ目連尊者ノ如ニシテ耳ノカシコキ德ヲ具シテ是モ居ナカラ千里ノ外ニ蚊ノナク声ヲ明ニ是ヲキ、侍リ今我朝ノ聖德太子モ又如レ此昔ノ離朱カ明成眼ヲカラストイヘ^レ宮中ニ居給ヒナカラ天竺震旦十方ノ吏ヲ皆照覽ス^ナイニシヘノ伶倫カ耳ニアラサ^レ^シ上ニ座シ給ヒテ本朝日域ノ卅六人ノ言葉ヲコトク^ク聞テハキマヘ給ヘリマコトニ聖德太子ノ御本地救世觀音三世了達ノ智恵ホカラカナリトイヘ^レ隨類應同ノ前ニハ不思議ナリケル御吏共也太子ノ十德ハ一ニ力ハ金剛力士ノ如ク

二ニ智恵ハ大聖文殊ノ如ク三ニ慈悲ハ觀音ノ如ク四ニ忍辱ハ羅云ノ如ク五ニ說法ハ富樓那ノ如ク六ニ八身ノカロキ夏疾風ノ如ク七ニ雲ニ飛夏集鳥ノ如ク八ニ香ハセンタンノコトク九ニ容顏花ノ如ク十ニ身軀ハ楊柳ノ如クソウシテ普天卒士バツクンニナラヒナキ太子ナリト云々一切衆生ヲ方便ヲ以テ弥陀ノ淨土引入センタメニ如是神通ヲ現シ玉フ

十七ウ以丁白

- (1) 「ク」の下、胡粉で「シ」を消す。
- (2) 「夏」の下、胡粉で「コト」を消す。
- (3) 「度」の右下、胡粉で「ハ」を消す。
- (4) 「ア」の下、胡粉で「シ」を消す。
- (5) 「イ」の下、胡粉で「ヒ」を消す。
- (6) 「ヤ」の下、胡粉で「約」を消す。
- (7) 「中」の下、胡粉で「十」を消す。
- (8) この行の上欄外に、左を上として、「此処入紙アリ」と朱書。次の一紙がはさまれる。

「正法輪藏太子十一才三十六人ノ処入紙

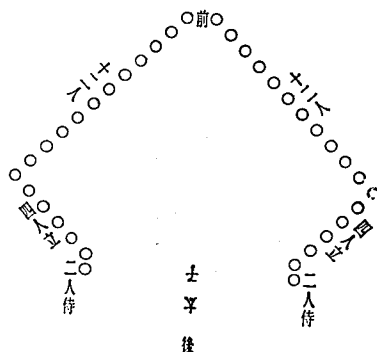
平氏傳作「難辞」云付

青蓮之御堂之内在ニ佛ニ有ニ光明ニ則

明々光明ナケレハ穴暗仁軀之邊出何

處^{トコロ}曾^{ソノ}太子眼^ミトハスル也

又云母^{ハハ}ニ度不^レ逢^ミ父^{ハハ}ニ度逢^ミ諸^{モロ}五^イ体^ミ置^キ
何^{ナニ}曾^{ソノ}クチヒル也ト日月急^{シツ}ギ廻^{マワ}レ^ル兔^{ウサギ}鳥^{トリ}
光^{ミツ}去^クラス明^{アカリ}也



イ、「有」の右下、墨がはねて読みにくくなった上に、朱で「レハ」と送る。
ロ、「廻^レレ」墨がはねて読みにくくなった上を、朱で「廻^レレ」とおさえる。

- (9) 「ケ」の下、胡粉で「ヘ」を消す。
- (10) 「交」の下、胡粉で「イ」を消す。「倭」としたものか。
- (11) 「林」の下、胡粉で「小」を消す。

- (12) 「弓」から左へ墨線を出し、「。二」と墨書。
 - (13) 「早」の左に「三」と墨書。
 - (14) 「足」の左に「四」と墨書。
 - (15) 「鳥」から左へ墨線を出し、「。一」と墨書。
 - (16) 「上」の下、胡粉で「已上」を消す。消された文字は「三」と当大であったものを、現行の如く、小さく直したもの。
 - (17) 「云」と「歸」の間に朱「。」印を記し、右に「南无の字アルヘキカ」と朱書。
 - (18) 「蓮」と「茎」の間に朱点を記し、右に「花ノ字アルヘキカ」と朱書。
 - (19) 「八耳」の左訓「ヤツミミノ」を胡粉で消す。
 - (20) 「レハ」の下、胡粉で「ルニ」を消す。
 - (21) 「自」の下、胡粉で「ノ」を消す。
 - (22) 「自」は「ノ」の上に重ね書き。
 - (23) 「ト」の下、胡粉で「ノ」を消す。
 - (24) 「力」の送り字「ハ」を胡粉で消す。
- * 1 順故は、「矢」を「失」を表記するが「矢」と改む。
* 2 「竹」の字の誤カ。
* 3 「ヲハツテ」の誤カ。
* 4 「ノ」脱カ。
* 5 「一」は「童子」の略記。
* 6 あるいは「トラク」の「ク」を平仮名から書写する時、片仮名にし失したものか。祖本の形態を推する手懸りか。

(十二ノ初丁)

太子十二歳御時

年号ハ鏡常四年^{壬卯}秋七月敏達天皇勅シテノタマハク

今百済國ニ葦北ノ國ノ造^{ミヤコタチソツニヤウ}達卒日羅^{ミヤコタチソツニヤウ}伝賢人アリト聞

侍也朕カノ賢人ヲ求メテ國ノ政道ハカラントテ則^{ミヤコタチソツニヤウ}紀伊國

造^{ミヤコタチソツニヤウ}押勝ト吉備ノ海部ノ羽嶋ト兩人ヲ百済國ニ遣唐使

トシテ日羅ヲ請シ給時ニ百済國ノ王日羅カ賢人ニシテ

智計ヲ、キ更ヲオシミテ日本ヘ渡シ奉ラス天皇カサネテ羽

嶋ヲ遣^シテ日羅ヲ請シタマフ其ノ時羽嶋百済國ノ王ニマ見^ミ

ヘサル以前ニヒソカニ日羅ニ對面シテ日本ノ天皇ノ勅使ノヨシ

念比ニ語リケレハ日羅カ云^{イハクシモウ}嚴猛ノ氣色ヲシテ求メタマハ、

日本國ノ天皇ノ威ニヲソレイカテ異儀ニ及^シト申サレケル羽

十八

嶋意得テ百済國ノ王ニムカヒテ日本ノ天皇逆鱗甚シク

天氣モツテノ外ナリナンソ日羅ヲ濟シ給^ハサルト嚴猛ノ氣色

ヲナシテ申サレケレハ百済國ノ王無^ニ左右^ニ渡サレケリ吉備ノ海

部羽嶋日羅ヲ引居テ同ク舩ニノリ難波ノ浦ニ帰朝セ

リ天皇勅シテ阿倍ノ臣目物部^{モノヘ}贊子^{サネコ}大伴ノ糟手子^{カサテ}

等ノ群臣ヲ遣^ツシテ國ノ政道ヲコヒタマフ時ニ太子日羅

ハ勇ニシテ智計アリ身ヨリ光明ヲハナチテ火焰ノコトク異

相アルモノト聞シメサレ御スカタイヤシクシテ御カホニスミヲスリ

アサノ衣^ヱナハノ帶^{オビ}ヲムスヒタレマシノ同年ホトノ十二歳

ノ下司^{ゲス}ノハラハハ十余人メシクシテ太子難波ノ浦ニ御行

シテ下司童子ノ中ニ立マシハリマシノテ肩^カヲナラヘ袂^{オモト}ヲツラ

十八

(十二ノ三丁)

乙

ネタマヒケル也時ニ日羅彼十余人ノ童子ノ中ニ太子ヲアヤ

シミ奉^{マツ}奴子^{ヌコ}ニツケテイハクコ、ナル童子ハ身ニ通力アツテ

心ニ神力有^キシカノ衣^ヱ裳^カノ色ノ紋^イヲキタル童子也^{ハシヘ}アヒカ

タラヒテキタルヘシトイヘリ太子御耳カシコキ御更ナレハコノヨシ

ヲキコシメシテヤウヤクニケサリ給ヘリ時ニ日羅イソヒテ飛出テ

ヲヒ奉^ツケル太子ノ御ウシロノ御衣ヲ日羅手ニ唯今取^付。奉ト

ヲモヒ侍リケレヒツイニハ不叶手ヲムナシクシテ飯^イ侍^イ又太子父ノ

天皇ニ申給フ様彼ノ大國ノ旅客^イヲウカ、ヒ見侍^ミレハ一人

ハ阿児カ先生ノ才子日羅ト申ス者也今ハ心ヤスク御遊ルシヲ

カウムリテ前生ノ事^イヲタカヒニ清謨^{キヨモ}スヘク侍ルトテ常ニメ

サル、トコロノ赤衣ヲキタマヒテ難波ノ浦ニ御幸成給ヘリ也²

十九

此時日羅庭上ニ跪^{ヒツマツキ}テ合掌⁴シ涙ヲ流シ心中ニヲモヒツラネテ

侍リケルハ是ハ正シク我本師ノ生レカハリ給ヘル御姿也昔ノ師

匠^ハ杵^ツノ老人ノ躰ニテマシマスヘキニ二生ニ形ヲ改^メタマヒヌレハ僅^ツ

二十一歳ノ童子ト成セタマヘリ悲^{カナ}シキカナヤ我身ハ正シク

彼御才子也トイヘ先身ヲ改ス八旬ノ老躰也トテ涙ヲ流シ
ケル夏誠ニ以テ哀ナル夏也抑太子ノ得本地ヲ温ヌレハトヲク
ハ極樂淨土ノ縁処ノ大士チカクハ又補陀洛世界ノ教主也然
ルヲ今カクノコトク隨類應同シテ大悲ノ利生ヲ施シタマヘルト
テソノ礼文ヲトナヘテ云、教札救世觀世音 傳燈東方
粟散王トヲ返シノ三度礼シタマツリケリサテ文ノ意
ハ本地ハ救世觀音垂跡ハ東方粟散國ノ王位ニムマレ

十九ウ

(十二ノ三)

シ

タマフトイフ心ヲトナヘ侍リソノトキ太子トリアヘス兩句ノ文ヲツイ
テトナヘタマヘリ從テ西方來誕生開演妙法度衆生ト

太子モ是ヲ三度唱タマヘリ此文ノ心ハ御本地ハ救世觀音

無緣ノ慈悲ニ催サレ西方淨土ヨリ東方日本國ニ來テ

佛法ヲ弘衆生ヲ利益スト宣フ御心ヲ答タマフ如此太子ノ

御本地觀音ト礼シ奉ルトキ忽ミ眉間ヨリ光明ヲハナシ

日羅ヲ照日羅モ又身ヨリ光明ヲハナテタカヒニ照シ侍リキ

ソノ時太子御供ノ人々日羅ノメシクスル所ノ上下ノ旅客ヲノ

信敬ノヲモヒヲナシテ隨喜ノタナコ、ロ合侍リケリ其後ナンチ

ト多生ノ師才ノチキリ染重ニシテ今マタ再會ストイヘトモ

宿債イマタツクノハス殘命イクホトナクシテ殺害ノナンニ

二十オ

アフテ死セン夏見ルニ付テアハレ也我ハナンチカ昔ノ師ナレニ二生
ニムマレカハリヌレハ古躰ヲ改幼稚幼弱ノ童子也我生ヲヘタツト
イヘ昔ノ夏ヲハスレスマコトニワカレヤスクアヒカタキハ生死
無常ノ習也トテ太子モ御涙ヲ流シタマヒケレハ日羅□有
難高テ頭地ニ伏涙ヲ滴有様共未曾有ノ夏也御有
様即是也 太子御供ノ人々同ク哀ヲ催侍リキ其時
日羅悲難シテ曰悲哉唯今太子御驚覺ニヨリ先生ノ
夏ヲ悟侍ル昔君ニ別レシ後ハ更ニ乳ヲ吞子ノ母ヲウシナ
ヘル心地シテ一日片時モ本國ニ心トマリ侍ラス東海
日本國ニ生ルヘシトシメシタマフニヨリ君衡山御入滅ノ
後生レカハラズシテ命ノ中ニ唯今二生ノ師匠ヲ奉レ見コソウレ

二十ウ

(十二ノ四丁終)

キ

シケレトテサメノトウチナキ侍リケレハ太子ニ御ナミタ

ヲナカシ先生ノ御モノカタリアリケルナリ日本ノ諸類

ヲ方便シテ阿弥陀佛城ヲクリ給カタメニ師才共

アラハレ侍リキ今ノ衆生念仏信スル身ハ彼淨土ニ生

レヌレハ生々世々ノ夏ヨクシル事六通ノ樂果ヲウル也命

ニカキリナク无量佛同位也也有難御夏トモ也

二十一オ以下白

(二十一ウ目)

- (1) 「ノ」の下、胡粉で「ヲ」を消す。
 (2) 「ナ」の下、胡粉で「ヲ」を消す。
 (3) 「タ」の下、胡粉で「ル」を消す。
 (4) 「涙」の下、胡粉で「月」を消す。
 (5) 「方」の下、胡粉で「ニ」を消す。
 (6) 「イ」の下、胡粉で「ノ」を消す。
 (7) 「テ」の下、胡粉で「タ」を消す。
 (8) 「間」の下、胡粉で「元」を消す。
 (9) 「今」の下、胡粉で「命」を消す。
 (10) 「問」の下、胡粉で「因」を消す。
 *1 「遊」は平仮名を漢字と誤ったものか。
 *2 「是」脱か、あるいは「給へル也」か。
 *3 祖本「深」か。

十三ノ初丁

乙

太子十三歳御時

年号ハ鏡常五年^{敏達十三}甲辰秋九月ニ弥勒石像一鉢百濟國ノ

大王ヨリ日本國ヘヲクリ奉^{タマヘリ}彼本尊ヲ太子蘇我

大臣⁽¹⁾ニアタヘタマフ礼拝供養シ奉^{タマヒケル}ソノ時太子蘇我

大臣ヲ教化シテ願主トシテハシメテ大和國高市郡豊浦ノ

庄ノ内ニ大伽藍ヲ建立シタマフ彼仏閣ハ金堂三間四面ニ

阿弥陀ノ三尊普賢文殊也講堂七間ニシテ本尊ハ

釈迦樂師并ニ四天王五十六間ノ僧坊同、鐘樓一字經

蔵一字二階樓門一字五重寶塔一基堂ニハ文珠并ニ
 寶頭盧也右此大伽藍ヲ太子十^(三)ノ御年コトク作^ク
 ヲハツテ寺号ヲハ興嚴寺ト太子自カキタマヘリイマ

二十二オ

ハ可ノ名ヲ豊浦ト申アヒタ世、人カノ御堂ヲ豊浦寺ト
 申傳侍リ是ハ日本寂初ノ佛閣^(チ)リ太子彼ノ寺ノ

寶塔ヲ拝見マシノテ蘇我ノ大臣ニ語リテノタマハク宝塔

ハ佛舍利ノ器ナリカノ寶塔ニ佛舍利ヲアカメ奉ルヘシソレ

佛法ハルカアラス心中ニスナハチチカシ宜^ヨシク汝信心ヲモツハラニ

シテ佛舍利ヲ祈^キ請^ツ仕奉ヘシト教化シタマヘリヨツテ蘇我ノ大

臣信心專^ヘニシテ三七日ノ間^{*}ノタマハク先生ニ衡山ヨリ多生ノ間

佛法ヲ執行セシカトモ奇特アラハル、夏マレナリナンチステニ功

徳成就ノ人也自今以後ナンチト契^キラムスンテ善友知識ト

シテ佛法ヲ興スヘシ是マコトニ如来ノ真骨ナリトテ彼豊

浦寺五重ノ塔ノ心柱^シノ下ニヲサメ奉タマフソレ日本ハ天神七代

二十二ウ

十三ノ二丁

乙

地神五代数千万劫ヲフルトイヘ^ヒ佛法ノ名字ヲキカス神

武天皇ノ御宇ヨリ人皇初^{ハジメ}テステニ廿九代宣化天皇ノ

御治世ニ至^イ迄^マ一千余年ナヲ佛法ノ名字ヲキカスシカルニ

人皇卅一代敏達天皇御治世十三年ニアヒアタツテ生身

ノ観音聖徳太子ト示現シ御年十三ノ御時我朝日本國

ノ中ニ八大和國高市郡豊浦ノ里ニハシメテ彼塔ヲ立日本

無佛世界ニコノ佛閣ヨリ三寶ノ數ヲソロヘマシノテ仏法繁

昌ノ國トナシタマヘリ我等今三寶ニチカツキ一善ヲタクハフ

ルハミナ聖徳太子無邊ノ恩徳ニアラスヤ無量億劫ニモ

キ、カタキハ是三寶ノ名字也ソレ三寶^付テシナノアリト

イヘ^付コトニ末法ニハ住持ノ三寶ノ利益ヲ縁トシタマヘリ三寶

二十三オ

ハ^三仏一切衆生ノ為三ノ賊ヲ^キテ是ヲアタヘタマヘリ世間ノ

財宝ト申ハ過去ノ福業ツタナキ^モ一^ハ今生ニマツタク

感得シ難モノ也タマノ宿福ニヨツテ財宝ヲタクハフル人モ

更ニ心ヤスカラス遠近ニモトメ東西ニタツネ炎天ニアセヲ

ナカシ極寒ニ氷ヲシノク山ニハ山賊海ニハ海賊等ノ路次

ニハ煩^キニ肝^キヲケシ身ヲツカラカシ里ニハ殺盜強盜ノ難ヲ

オソル日夜朝暮ニ水火盜賊ノ難ヲウレヘテ身心ヲクル

シメ一生ハムナシクツクルトイヘ^付希望ハサラニツキカタシレ然レハアル

論文云 忽然^ト獨^リ趣^クニ冥余ニ時^キ繁^シ馮^ニ輩^ハ不^レ隨^ニ

前後^ニ調^ハ色相無^レ防^ニ寒温ニ身軀^ハ尪^ク弱^ニ一粒

不^レ裏^ニ心^ヲ神恍^ト忽^ト万^ノ夏^ノ如^シ夢^ノ仰^キ天^ニ拭^ク涙^ヲ不^レ

二十三ウ

十三ノ三丁

七

見^キ可^ク助^ス人^ニ臥^シ扣^キ胸^ヲ不^レ來^ラ可^ク怜^ム輩^ハ恒^ニ隨^フ身^ヲ物^ハ

是前世罪業永懸^ル心^ヲ哀^ム即後悔悲也トイヘリ

オヨソ世間ノ七珍万宝ハ一トシテマツタク冥途ノ資糧ナラス

シカレハ仏人間ノ財宝ヲ^カ財^ヲトシ給ハス今世後世助クル仏

法僧ノ三寶ヲ一切衆生ニアタヘタマヘリソレ三寶トハ仏法僧

ノ此^三也マツハシメニ仏宝ト申ハ一切ノ繪像木像等ノ仏并

ノ像是也一切ノ仏并各別ノ願不可思議ニシテ一称一札ノ

結縁ヲ以テ現當二世ノ願望ヲ助ケタマヘリ拜奉ニ罪ヲ

滅シテ善ヲ生スル徳アリ故ニ一切ノ衆生ノオ一ノ宝也三業

ヲカストコロノ罪障コトノ消滅スオ^三宝^ニハ一切ノ經論

聖教等也法花經ニハ若有聞法者無一不成仏ト説

二十四オ

又一称南无仏皆已成佛道トノヘタマヘリ大般若經理趣

分ニハ殺害三界一切有情不隨惡^趣トノヘタマヘリコノ

ユヘニ一論ノウチニ一旬ノ妙法ハ億劫ニモ難^レ聞一仏ノ名字ハ

優曇花モタトヘニアラストイヘリ故ニ三ノ宝ノ中ニハ聞法ノ

功德ヲモツテ第二ノ宝トシタマヘリ第三ノ宝ニハ一切ノ僧比

丘尼等也如^レ是三寶ヲ太子初テ御建立ノ興嚴

寺ニソロヘヲカントヲホシメサレ侍リケリ佛ノ宝ニハ善光寺ノ

如来ト太子八歳ノ御時新羅國ヨリ渡シ奉^ル所ノ金銅ノ

釋迦⁽⁸⁾ノ三尊等南閻浮提才⁽⁹⁾一ノレイサウヲアカメテ彼ノ

御寺⁽¹⁰⁾ニ三宝ノ中ニハ初ノ佛宝トシタマヘリ一切衆生ノ今世

後世ヲ助ケタマヘル第一ノ宝是也第二タカラニハ太子六歳

二十四ウ

十三ノ四丁

乙

ノ御時百済國ヨリ渡^ル率所ノ經論二百余卷一切衆生ノ

現當二世ヲタスクル有難法也第二ノ法宝トシタマヘリ第三ノ財

百済國ノ住僧善光寺ノ如来ノ御供シテ日本ニ渡^リ侍シ

惠聰^{ソツ}兩弁ト申二人ノ高僧ヲ彼寂初御建立ノ興嚴

寺ニ住持セシメ給ヘリ然トイヘ日本國ニ出家ノ男女モ未^ル

ナカリシ時代ナリシカハ尼衆一人モナシ一切ノ諸經ノ中ニ比尼⁽¹²⁾

尼ノ兩衆ヲツラネ僧宝トセリシカルニ此御時ハ百済國ノ二人ノ

僧衆住持シ侍リケレヒイマタ尼衆一人モナシ三宝未^ルソロハス太子三

人ノ御メノトヲ教化シテ出家セシメ我朝ノ衆生ノ仏道ニ入

ヌル先達トナシタマヘリ三人ノ御メノトノ其⁽¹³⁾交名ハ月益妃

日益妃玉照妃ト申三人ノメノトヲ御前ニメシテ教化シ

二十五オ

給フヤウ各々阿尼カ言葉ニライテ一言モ背^ズヘカラス然

ハ申ノフヘシトノタマヘリ三人ノ御メノトノウヘ⁽¹⁴⁾ニテモ未^ルキカサルコト

ニテ侍レハ出家セヨトオ⁽¹⁵⁾ホセカフムラン夏夢ニモシラサレハ各々

スゝムテ何夏ニテモ侍レ君ノ御定ヲハイカテカ一言モソムキ

奉^ルヘキクハシクウケタマハリ侍^ルナント申サレケレハ太子教化

シ給フ様ソレ多生廣劫ニモ人身ヲウクル事マレ也

タトヒ人身ヲウクルトイヘ⁽¹⁶⁾仏法ニアフコトモツトモカタシ

今タマノ人身ヲウケテ仏陀ニ結縁ナクシテムナシク

三途ノ古郷ニ皈ルハ寶山ニ入テ手ヲムナシクスルカコ

トシマコトニ後懷千万何ノ益カアラン一切ノ女人ハ花

ノ⁽¹⁷⁾ス⁽¹⁸⁾カ⁽¹⁹⁾タ⁽²⁰⁾月ノカホハセタヘナリトイヘ⁽²¹⁾五障ノクルシミ三

二十五ウ

(十三ノ五丁終

乙

從ノウレイフカクシテ佛力ニアラスハ淨土ニサラニノソミ

カタシタハ生々世々三惡道ヲスミカトシテ一度重苦ニシツ

ミナハ出離イツヲカ期スヘキアハレナルカナ鴛鴦ノフスマノ

下ニ比翼ノカタラヒヲナスコトモ芭^{モウ}蕉ノ葉ヤフレサルマノ

カタチ也カナシキカナ鸞鳳ノ鏡ニカケヲナラヘ芝蘭ノチ

キリヲムスフ夏毛露ノ命ノキヘサルホトノナサケ也盛成色

ノトマラサル夏ハナヲシハシル如^レ馬人ノ命ノ無常ナル夏ハ流

ルハ水ノコトシ今日ハナカラフルトイヘ⁽²²⁾明日ノ日又タモチカタシ

ハヤク佛陀ニ皈シテイヤシキ女人ノ五障三從ノ躰ヲアラタ

メスミヤカニ卅二相ノ菩薩ノ身ヲ得⁽²³⁾タ⁽²⁴⁾マ⁽²⁵⁾ヘ⁽²⁶⁾ト⁽²⁷⁾懇⁽²⁸⁾ニ教化シタマヒ

ケレハ三人ノ御メノト達タチマチニ發心シ出家セリマコトニ太子

二十六オ

ノ御教化ノ御言葉ムネニアタリキモニソミテコトハリ至極シ侍、

ケレハ三人ノ貴女達各イマタ盛成花^ノス^カタ月ノカホハセタヘナ

リトイヘモハヤク出家ノカタチトナリタマヘリ唯今迄八月益日益玉

照ト申サレケル人々出家ノ後ハ法名ヲツケタマヒテ一人ヲハ善信

一人ヲハ禪蔵イマ一人ヲハ惠善トサツケタマヒケリ故太子十

三ノ歳此寺ヨリ三宝ノ數ヲソロヘタマヒキ其ノ隨一ニイマ

コノ善光寺ノ如来ハ難波ノウミヨリ取^上奉^カノ

御寺ニ安置セラレタマヘリマコトニ日本無佛世界

三寶留布^ルノ國ト成侍ル夏ハ聖德太子十

三ノ御時ヨリノ御事ナリ

二十六以下白

- (1) 「三」の下、胡粉で「ヲ」を消す。
- (2) 「ア」の下、胡粉で「マ」を消す。
- (3) 「ハ」の上欄外、胡粉で「ト」を消す。
- (4) 「世」の下、胡粉で「後」を消す。
- (5) 「比」の下、胡粉で「丘」を消す。
- (6) 「ヲ」の下、胡粉で「テ」を消す。
- (7) 「佛」の下、胡粉で字を消すも、不明。
- (8) 「ノ三」の下、胡粉で「如来」を消す。
- (9) 「レイサウ」の下、胡粉で「靈宝」を消す。
- (10) 「三」の下、胡粉で「ノ」を消す。
- (11) 「ノ」の下、胡粉で「経」を消す。
- (12) 「三」と「比」の間に朱点を記し、石に「比丘ノ字アルヘキカ」と

浄勝寺丹山文庫蔵「正法輪蔵」研究並びに翻刻

書。

(13) 「シ侍」の下、胡粉で「セリ」を消す。

(14) 「スル」の下、胡粉で「シテ」を消す。

* この所祖本脱落があるか。研究を参照の事。

(十四ノ初丁

乙

太子十四歳御時

年号ハ敏達天皇十四^乙守屋太臣邪見^イノ心ニ住シテ

佛法最初ノ興嚴寺ト申堂塔ヲヤキハラヒ佛像経卷

僧尼ヲホロホシトカニヲコナヒ様々ノ惡ヲ行シ侍リ抑信州、

善光寺ノ如来我朝ニ渡^ルタマフ夏ハ欽明天皇御即位十

三年^{申壬}ノ夏也尾興^ビ大臣邪見ノ心ニ住シソノ比天下ニ

疫病^{ヤウヤウ}ノ難ヲコリ是彼^カ百濟國ノ異形ノハサナリトテ如来

ヲ様々ニトカニヲコナヒ奉^ル後ニ摂津國難波ノ海ニステ奉

テ卅三年ノ間海上ニウカヒ波ニタ、ヨヒ給ケリ其後太子

御出世アリテ生年十三、年初テ大和國高市郡ニ

興嚴寺ト申大伽藍ヲ建立シテ難波、海ヨリ如来ヲ

二十七オ

トリアケ奉テ^イ寺ニ安置奉^ルタマヒケル比又天下ニ病
ヲコリケル守屋大臣時ノ御門敏達天皇ニ奏シテ申

上我朝日本國ハ神ノ初テツクリ出シ給ヘリ故ニ此ヲ神

國トナツク上一天ノ君ヨリ下万民ニ至迄テ貴賤上下ノ衆

生ヲウミソタテ給フユヘニ神ノ氏子也國ノマツリ夏ハ神

事ヲサキトスシカルニ今聖德太子初テ我朝ニ堂塔

ヲ立彼異形ノ物ヲ崇タマフユヘニ日本神明ノ靈アレテ

疾病ノ災ヲヲコシタマヘリヒトヘニ此異形ノ物アカメ給ユヘ

ナリ天下ノヲホキナルナケキ國土ノ災難也ハヤク御ユ

ルシヲカウムツテ彼ノ堂塔仏像ヲホロホシナント存シ

侍ルト申サレケレハ時ノ御門敏達天皇更ニキコシメシ

二十七

(十四ノ二丁)

オ

入マシマサスシテ勅シ給フ様ソレ前車ノクツカヘルヲ見テ

後車是ヲイマシメトストイヘリ先帝ノ御代ニナシテ

父尾興大臣邪見ニシテ彼如来ヲトカニヲコナヒ奉

シニ諸天ノトカメアツテ天ヨリ火ノ雨フリ内裏モヤケ

君モ臣モ同シクモニウシナハレ給シ夏アニヲソルヘカラサラ

ンヤ又ツ、シマサルヘケンヤト更ニ御免ナカリシ時ニ守屋仏法

破滅ノ惡念弥、深ナリ侍リキ守屋モトヨリ神明ヲ

信スル物ニテ侍ル間アハレ我神明ノ訛謚ヲウケタマハリ

タトヒ君ハ御免ナクモ神ノ御ユルシアラハ佛法ヲホロホシ

ナント思ヒ侍リケル才六天ノ魔王障導神ト申神ヲ

指ヲロシマサシケナル神子ノ跡ヲナシテ守屋大臣ノ宿可⁽³⁾

二十八

ニツカハシ侍リケレハ守屋大臣自タイメンシテトフテイハクナンチ

何モノソ神子答曰自ハ神子ト申者也ソレ一切ノ神明ハ

神通自在ニマシマセモ薄地底下ノ凡夫ニ神跡ヲ

現シ物ヲノタマフ夏サラニナシ必ス神子タクシテ一切衆生

ノ心中ノマヨヒヲツケシラセ給フ神明ノ物ニテ侍ル也トコタヘ

時ニ守屋大臣大ニヨロコビテ殿中ニ賞入テイサ、カ

心中ニウタカヒ侍リ我氏神符都大明神ト申レイ神

ノ御タクセンヲウケタマハラントク、シヤウシ奉ト申サレケレハ

神子ウケタマハツテタチマチニ神明ヲ下奉身ヲウユカ

シ手ヲタ、キ五躰ヲ大地ニナケヲトリクルヒ侍ケル有様

ヲモテラムクヘキヤウ更ニナクヲソロシサハ申ハカリナシ殿

二十八

(十四ノ三丁)

ク

中ニヒ、キ渡^ツテ^{ライアン}雷電ノコトク一時ニクルヒシツマツテ大

音声ヲハナツテタクセンシテ云抑我朝神國トナリ数千

万劫ヲヘタリ乃至人代ノ今至迄テイツレノ代ニカ他國

ノ人形ヲアカメテ國ノマツリ夏スルヤ奇恠也人形ヲ崇

カ故國疾病ノ災ヲオコシ也申様是也^{*1}

守屋信敬ノカウヘヲカタムケ随喜ノタナコ、ロヲ合テ種々ノ財

宝ヲアタエ侍ケレ^レ本ヨリ大魔縁ノコトナレハ一座モトラスカキ
ケスヤウニウセ侍守屋実ノ神明ト思ヒ^ト、弓削小連^{コムラシ}
折フシ病患ヲウケ万死一生ナリケル宿所ニハセムカツテ抑
ナンチカヤマヒ別ノ子細ナシ太子他國ノ異形ノ物ヲアカ
メタマフユヘ也右神明ツケ物語シ侍有様是也

二十九オ

同日守屋兄弟二人多ノ家人ヲメシクシテ彼仏法サカン
大伽藍豊浦寺中ニハセ入テ自下知シテ堂塔仏閣ヲヤキ
ハラヒ佛像經卷ヲ焼亡シ僧尼ヲ様々逆罪ヲヲカシケル
有様是也

抑太子三人ノ御メノトノ尼衆等ヲセメ出シテ袈裟等
ノ法服ヲハキトリ庭前ノ木ニシハリ付タチマチニ死罪ニ
ヲコナヒ可申旨守屋申ケルヲオノ弓削小連カ申ニヨ
リ死罪ヲトメテ播磨國ニ流罪スル有様是也
次百濟國ヨリ三尊ノ如來ニ付奉テ二人僧此國エ
渡彼ノ寺^三止住シ侍リケルヲ又法衣ヲハキ取俗衣ヲ
キセツタナキ俗名ヲ付右次郎左次郎奴トヨヒ配所

二十九ウ

十四ノ四丁

ヤ

ハ山城國泉川ノホトリニ流也二人各別堂塔ノ内ニハ大勢
乱入シテ忝モ常住ノ仏并ヲ取出奉ントスルニレイサウ盤

淨勝寺丹山文庫藏「正法輪藏」研究並びに翻刻

石ノ如ウコキタマハス四面ヨリ火ヲハナシ天ニオホヒ霞ノ如ク
焼アケ奉也震旦日域三國相承ノレイ仏今ハ日本ノ
機縁ツキサセタマヒケルカヤ東土ノ衆生シク縁ノアサキ更
ヲモヒシラレタリ虚空ヲ飛鳥ハホノホニ羽ヲタレカナシミノ声
ヲイタス陸地ヲハシル獸ハ猛火ニムカツテ涙ヲナカスマコトニ
非情ノ草木迄モ皆カナシミノ色ヲアラハス傳燈聖德太
子本願ノ蘇我大臣兩人ノ御心中イカハカリ思召同
ケムリトナリ行テツレナク殘レル我身カナト天ニア
コカレタマヒケル是也

三十オ

カノホノホノ上ノ空^二一ノ寄特アリ万里ノ虚空ヲサシテミエ
アカリケル猛火黒煙ノ中ヨリ金色ノ光ヲ放テ虚空ヲ照シ
タマヘリ諸アヤシミ見ニ釋迦弥陀ノ二尊ヲノ鳥瑟ヲ
ナシテ月ノ初テ雲聞ヲ出カ如光明ハナチテ虚空ニ飛ア
カリマシテ彼御寺邊ノ池ニ入水ヲモテニウカヒテ^レニ立
并給ヒケリ時ニ太子蘇我大臣御覽アツテ五鉢ヲ地ニ
ナケ隨喜ノ御涙ヲナカシニ尊ノ利生猶日本ニトマ
リタマハン夏ヲヨロコヒタマヘリ其時守屋兄弟二人家
人イカリヲナシ忝生身ノ釈迦弥陀等ヲサンノニア
ツカウシ奉ル其言葉云アラキネカハクハ我氏神

一三三

符都大明神天浦神国ノ諸神トヲクハラヒタマ

十四ノ五丁終

三

ヒトヨハハリケレハ彼釈迦陀ノ兩尊水底ニシツミ
黄金ノハタエ□カクセリ是也

彼惡人同類共因果ニテ大瘡ノ病ヲ得タリ

堂塔佛塔像經卷一爐ノ灰ト也其中ニ百濟国

聖明王ヨリヲクリ渡シタマフ一光三尊ノ如来火ニ入

レヤケス水ニ入レシツマスケカレス時守屋大ニイカテ

幾内五ヶ國ノ炭ヲアツメ鍛治ヲヨヒフキテ七日七

夜ナヤマシ奉然トイヘ阿弥陀如来ハ更ニ少モ

ソシタマハス猶光明ヲ放テ一里ノ内ヲ照シタマフ

守屋不及力難波ノ江ヘナケ入奉ル此ノ日

内裡金刺宮天ヨリ火フリ下リヤキウシナヒ

敏達天皇□内裡ノ上ニ黒雲一村ヲ、ヒテ

其中ヨリ異類異形ノ大鬼神等有テ高

声ニヨハツテ云ナンチ父欽明天皇仏法ヲ信

受セスシテ破

三十ウ

(2) 「ケ」の下、胡粉で「テ」を消す。

(3) 「野」は、何らかの字の上に重ね書きされているも、下の字不明。

(4) 「縁」の左に朱点を記し、左に「王ノ字ニテアルヘキカ」と朱書。

(5) 「ツ」の下、胡粉で「ノ」を消す。

(6) 「不」の下、胡粉で「力」を消す。

(7) 「へ」の下、胡粉で「ニ」を消す。

(8) 「ノ」の下、胡粉で何かの字を消すも、字不明。

(9) 「破」の続きに、小さく「コノスヘアルヘキカ」と朱書。

三十一ノ初下

ケ

是太子三十一御歳

年号吉貴九年壬戌春二月之比客星出現丑寅

數千万羽鳥欄枝クワエテ洛中多出現

推古天皇聖德太子御慮万人及仰天侍時殿下聖德

太子有御尋太子天奏云抑是忝天照

大神同躰靈神也本地久遠實成往古如来周遍

法界流遮那佛也實百王守護靈神我朝示現

御坐以瑞相彼鳥數万欄枝クワエテ顯現スル可

奏給ヘリ次客星丑寅神變之夏奏給ハク

夫彼客星者其名天台星云星也我朝靈佛出現窮

未來際自王城住丑寅可利衆生瑞相也於震旦六

(1) 「邪」の下、胡粉で「見」を消す。

三十二オ

生間弘佛法□時彼星出現又日域此星出給へリト
奏給へハ上自□一人下至三萬民心平同三月之比安
藝國國司內舍人佐伯鞍職云者參內奏様去比

乘船恩賀嶋申嶋邊浮船海上遊侍時西方奉錦帆

船見來竜頭之船也船中三人有貴女捧紅

奴佐曰其形如天女佐伯告云吾爲三王守護

離本町近王城而相見彼嶋實嚴思食

末代利物之砌ト此嶋者也守法大王町

弘佛法并百王濟渡一切衆生依彼嶋嚴留

神慮早吾号嚴嶋大明神此嶋中大小杜檀

并海上造百八十間廊吾告奉崇給へリ又重示給へリ

三十一ノ三丁

乙

三十二ウ

法身恒寂靜 清淨無二相

爲度衆生故 示現大明神

實法性不二之色身雖寂光淨土朗隨類應

同之利生巨海之浪和光示早彼嶋御船押

寄給へリト奏ス 尔時推古天皇奉肝未然

方来之御徳又三人天女之事有御尋

太子天奏云 抑是三人之天女者本地久

遠實成之如來也垂跡沙渴羅竜王息女也

彼竜王有四人息女 第一息女年始八歲依
法花一乘功德速南方無垢世界唱即身成佛
童女也 □息女今我朝影向守臣所弘佛

法并爲三民利益安藝國嚴嶋ト末代利生之

砌給へリ 第三息女從地神五代始近江國浮

湖上竹生嶋ト和光利物之靈地給へリ 第四

息女東國相模國海中領江嶋隱古佛正法明

如來之本地暫示現大弁才天十五童子爲上

首与五億八千部類眷屬共顯末代利生字賀

神將王給へリ 早我君尊敬信可奉崇者也

奏給へハ 推古天王大有御信敬以當國々司

爲奉行彼嚴嶋大明神奉崇給へ時神領御寄

進之狀云 奉寄進 嚴嶋大明神々領事

當國中水田一千七万八十町 并修現仙山

三十一ノ三丁

乙

三十三ウ

八千余町 右當國々司每化可捧上分田全

不可輕神威社頭破壞之時國司必經失奏

點國中杣可奉修理其間材木枳皮等不可

運上京都 吉貴九年 壬戌三月日

三十三ウ

異説云嚴鳴縁起云太子廿一御年推古天皇

即位元年歲次端正五年十一月十二日嚴鳴

大明神始ヲ頭給へリ時推古天皇御願彼嚴鳴

廻廊一百八十間浪上造重諸社並ニ覺令造立給へリ

大宮權現大日阿弥陀普賢弥勒中宮十一面

客宮毗沙聞其外王子諸神釋迦藥師不動

地藏乃至別宮八幡大菩薩也

如斯大小諸神多分聖德太子依御天奏(15)在々

處々奉崇給へリ實我朝神國往古如來久

遠薩埵各和光盛(16)隨類應同之施利益給へリ

悲花經云我滅度後於末法中現大明神廣

度衆生昔ノ釈尊在世靈山一會ノ菩薩賢

聖等皆悉ニ於末法中顯ニ神明給へリ

爰以解脫上人筆云弟子等如來在世之昔

雖レ纏レ一代八万教納ニ神冥濟度ノ今幸得結(17)

八相成道來縁此是諸佛善巧之可レ及也又

諸佛變化之可レ搆也皇宿照レ暗影浮ニ信敬

皈依之水ニ日神耀ニ天光銷ニ四州十惡之霜ノ加レ之

三十四ウ

三十四オ

(三十一ノ四丁)

エ

深崇ニ生死之忌ニ即厭離生死之戒也鈔ニ精進之誼ニ亦勤精進之勸也神冥無レ外恭敬

則顯ニ祭席ニ淨土非遙動行スレハ則在ニ道場ニ云如斯

一切神明仏隨其御本地皆是往古如來久成

之薩埵也垂跡和光之利生本地一跡眼目異

名也如水凍ニ聖德太子此無佛世界神國有ニ

御出世ニ天照大神成ニ三十八代之御孫ニ奉ニ爲ニ日

本國中之神冥法樂ニ弘ニ大小乘ニ佛法ニ奉ニ助ニ和光

之惠命ニ仍ニ一切神冥ニ皈ニ仏ニ法僧ニ受ニ本地之法樂ニ給へリ

同年十月二日信濃國伊那若續郷宇稻村之

士民本田善光子息本次善助二人推古天皇

三十五オ

參ニ内大裏大和國高市郡少壘田宮ニ奏樣

抑今年伊那郡之年貢運上ニ次ニ爲ニ難波池(18)

光物見彼池廻見待處光物自ニ水下ニ飛上(19)

善光示ニ云夫汝往昔吾大檀那也於天竺(20)

月蓋長者時我身以ニ閻浮檀金ニ移止ニ爲ニ未來ニ

崇ニ大林精舍ニ大檀那即汝身此也以ニ閻浮檀金ニ

移止ニ仏鉢即我身也尽ニ天竺ニ機縁ニ於ニ百濟國ニ汝

生ニ天子ニ止ニ我亦天竺ニ利生ニ飛ニ移ニ震旦ニ事汝離思

故也於震旦二代々一千年之間生天子十善之位
重崇我其後百濟國機緣尽東海日本國生汝
士民本田我汝跡送渡日本侍於天安震旦

三十五ウ

(三十一ノ五)

崇我何於日本國崇我哉早汝生國可奉具足
於我日本國窮未來際利衆生思食示給御音
承時歡喜淚難押見奉御外更有離之思不侍
奏爾時推古天皇驚敎慮御坐奉拜見

如來不淺御信敬之思一時殿下聖德太子有御清
談云惣南閭浮提第一靈佛城外爭奉出遠國
奉下事敎慮外思食可也聖德太子御奏聞申
實化勅定可奉止王城雖靈佛御坐抑彼本尊者
釋迦手自可奉頭生身阿弥陀如來一光三尊聖容
南閭浮提第一之佛鉢也忝哉過去檀那待
御至令沈水下御鉢給へり仰願唯化佛意奉下

三十六オ

東土有御奏聞猶天皇無勅許太子又奏
去三月之比出客星丑寅驚敎慮侍時
今年靈佛出世御守王法利衆生奏事
有如來御下一可利末世之衆生前標也

淨勝寺丹山文庫藏「正法輪藏」研究並びに翻刻

又勝鬘古生年二歳向東方唱南無佛事
如來難波浦放信濃國御光照今本田身
以此二歳二月十五日早且向東唱南無

佛一早化佛意下東土給へト推古天皇
有御感下勅許本田成悦奉貢如來
內裏罷出其時如來放光照內裏給上
自一人至二百官礼拜如來本次未内

三十六ウ

(三十一ノ六)終

裏侍時太子召云現娑婆東土三尊
覺王佛成就我願既顯神明利生本次
此御事承本田追次申様ケニヤサハトウト
サンソオホエタリヤナ實東土土民語哀貴
御夏共也夫以菩薩之結縁不捨之德
御觀音一門我名永不捨離生々也々必代
其若云普賢大士恒順衆生發大誓願云
實弥陀如來ノ御誓光明遍照十方世界念
佛衆生撰取不捨之經說仰々信可信
御誓也

三十七オ
以下白
(三十七ウ)白

- (1) 「羽」の送り仮名「ハノ」の下、胡粉で「ウ」を消す。
- (2) 「示」と「現」の間、左側。胡粉で「ニ」点を消す。
- (3) 「申」の下、胡粉で「ト」を消す。
- (4) 「有」の下、胡粉で「貴」を消す。
- (5) 「城」の下、胡粉で字を消すも不明。
- (6) 「也」と「守」の間に朱「。」点を記し、右に「於彼嶋」と朱書。
- (7) 「匕」点は「三」点の上に重ね書き。
- (8) 「押」の下、胡粉で字を消すも不明。
- (9) 「肝」の左に朱点を記し、右に「計」_イと朱書。
- (10) 「童」の下、胡粉で字を消すも不明。
- (11) 「王」の下、胡粉で「皇」を消す。
- (12) 「威」と「社」の間に朱点を記し、右に「及三代」_イと朱書。
- (13) 「矢」の右に「天」_カと朱書。
- (14) 「云」と「太」の間に朱「。」点を記す。
- (15) 「々」の右に「之」_イと朱書。
- (16) 「々」の右に「之」_イと朱書。
- (17) 「飯」の下、胡粉で字を消すも不明。
- (18) 「池」は、「地」の上に重ね書き。
- (19) 「見」の左下「一」点を朱書。
- (20) 「池」は「地」の上に重ね書き。
- (21) 「於」の左下「二」点を朱書。
- (22) 「竺」の左下「一」点を朱書。
- (23) 「尽天」の下、胡粉で「天然」を消す。
- (24) 「ハ」は「ト」の上に重ね書き。
- (25) 「也」と「恭」の間、胡粉で「恭」を消し、一字分あける。
- (26) 「化」の左に朱点を記し、左に「任」_ニと朱書。
- (27) 「来」と御の間に朱点を記し「信州イニ」と朱書。
- (28) 「古」の下、胡粉で「故」を消す。

- (29) 「照」の送り仮名、「シ玉キ」の「キ」の下、胡粉で「テ」を消す。
 - (30) 「早」の右「平」_イと朱書。
 - (31) 「ト」の下方に朱点を記し、右に墨線を出し「再三、奏聞アリケレハ」_イと朱書。
 - (32) 「貢」の「エ」の画に重ねて「刀」と朱書し、「負」とする。
 - (33) 「蠱」の「三」に朱書し、「四」とし、右に「マカ」と読みを朱書。
 - (34) 「次」の下、胡粉で字を消すも不明。
 - (35) 「結」の下、胡粉で字を消すも不明。
 - (36) 「門」の中に「耳」_イと朱書し、「聞」とする。
- * 1 「シ」の次「、」があったものか。
- * 2 「間」の誤カ。
- * 3 「浦」は「津」の誤りか。

(三十六ノ初)

サ

是太子三拾六歳御時
 年号光宛二年_{歲次丁卯}夏五月之比先生御本尊
 持經等自_ニ衡州國_ニ召寄給唐船之有様是也
 抑太子先生衡州山過去六生々替弘_テ佛法_一
 給第六生_ニ御名_ニ号_ニ念禪法師_一最後入滅之御
 時一万人御弟子御遺言給_ニ吾則此土機縁_一
 盡_ル間已入滅生重受_ニ人間_一而東海有_ニ嶋國_一名_ニ
 大日本國_一彼國々王生_ニ太子_一成_ニ一天自在_一身_ニ

思樣弘佛法、利衆生、我入滅之後、今相當三十七年、必使者遣此寺、種々道具可召寄、諸僧中其時存命給人、吾使相待多生、本尊持

經等、可被送遣、御魂現金色僧、生日本王宮、給御歲三十六、夏比先々生、御弟子達、御遺言不違立、御使先生之御本尊持經等、御道具可被召是也

道具可被召是也

推古天皇此由有、御奏聞遣唐使申請給、抑派先生震旦、衡州國、衡山於般若、峯多生之間、可崇行一本尊持經、御坐今年遣唐使申請件、本尊持經其外道具等、奉迎取法隆寺奉崇置、末代欲令成三万人之皈依也、天奏之給、天皇驚信敬之、敍慮有御評太子悅思食召諸臣下、何立遣唐使、異國僧俗問答、先生御具足取可

(三十六ノ二)

キ

參器量之仁相給處則是也、是其仁也、姓名大礼小野大臣妹子申、遣唐使定思食、其由勅大臣給、答言抑震旦衡州國、蒼海万里之境身、大臣命之、案否雖知難多、群臣中遣唐使被定思食侍上

淨勝寺丹山文庫藏「正法輪藏」研究並びに翻刻

三十八オ

三十八ウ

左右君御意不背被領狀申、太子重勅給、抑吾衡山入滅、以來已送卅七年之春秋、雖歲月舊、彼國往道遠々思遣、唯如昨日、今日然渡、彼國道遠近可令教知、先吾朝鎮西從羽方、津至衡州、津海上遠五万里之道也、彼從衡州津、吾住衡山、陸地遠二千八百三十余里也、誠若波路遠、雲立三重千里、巨海慢々、隔雲路之境、自非

三十九オ

神冥之助、外輒不可趣、彼國而唐、松中天照大神奉始日本國中、靈神奉勸請、度海安穩之由、可被祈請、五万里海上無事故、衡州津被渡、付震旦國有數道、東懸道瀧陽道香山道高陽道西州道北海道南海道中山道江南道江北大道等也、其中江南道者赤懸、云河南有道也、自余道今三十余里近直路也、彼般若峯近付四十余里之間、松栢並生、其松原猶南四五里許行過、即吾住般若雲寺、近可見惣彼衡山、東西南北中、天有五萬峯、吾住三南般若峯也、彼寺南向建、我昔僧形、跡繪書留侍是、今南岳大師

三十九ウ

(三十六ノ三)

三

御影取⁽⁷⁾へリ二人弟子⁽⁸⁾、同⁽⁹⁾移留我影、左右懸⁽¹⁰⁾並侍如⁽¹¹⁾、斯師弟三人⁽¹²⁾、同繪畫留安置⁽¹³⁾、必是⁽¹⁴⁾可⁽¹⁵⁾被⁽¹⁶⁾拜見⁽¹⁷⁾我住方丈⁽¹⁸⁾、松木造⁽¹⁹⁾、名⁽²⁰⁾松室⁽²¹⁾、位方僧坊⁽²²⁾、桂木作⁽²³⁾、故云⁽²⁴⁾桂客殿⁽²⁵⁾、也此等⁽²⁶⁾禪坊⁽²⁷⁾、禪室⁽²⁸⁾更未⁽²⁹⁾朽傾⁽³⁰⁾、多門徒別⁽³¹⁾、相⁽³²⁾迎其月日⁽³³⁾、遠忌⁽³⁴⁾月忌⁽³⁵⁾之仏事共執行⁽³⁶⁾侍也、又彼寺⁽³⁷⁾弟子⁽³⁸⁾分⁽³⁹⁾、僧⁽⁴⁰⁾一万人止住⁽⁴¹⁾、今年⁽⁴²⁾卅七年間更⁽⁴³⁾々逝去⁽⁴⁴⁾、今僅⁽⁴⁵⁾三人⁽⁴⁶⁾、殘⁽⁴⁷⁾彼⁽⁴⁸⁾三人⁽⁴⁹⁾老僧⁽⁵⁰⁾許⁽⁵¹⁾、遣⁽⁵²⁾三具⁽⁵³⁾之衣⁽⁵⁴⁾、三消息⁽⁵⁵⁾入⁽⁵⁶⁾一箱⁽⁵⁷⁾、任⁽⁵⁸⁾名字⁽⁵⁹⁾可⁽⁶⁰⁾請取⁽⁶¹⁾吾先生⁽⁶²⁾、道具雖⁽⁶³⁾其員多⁽⁶⁴⁾、法花經⁽⁶⁵⁾御坐⁽⁶⁶⁾一大事⁽⁶⁷⁾、思食⁽⁶⁸⁾者也⁽⁶⁹⁾、相搗⁽⁷⁰⁾無⁽⁷¹⁾相違⁽⁷²⁾、取⁽⁷³⁾可⁽⁷⁴⁾參⁽⁷⁵⁾勸⁽⁷⁶⁾給⁽⁷⁷⁾、於⁽⁷⁸⁾御前⁽⁷⁹⁾親承⁽⁸⁰⁾此由⁽⁸¹⁾、人々万人⁽⁸²⁾奉⁽⁸³⁾成⁽⁸⁴⁾奇特⁽⁸⁵⁾之思⁽⁸⁶⁾、給⁽⁸⁷⁾也時⁽⁸⁸⁾大臣⁽⁸⁹⁾勸

四十

答被⁽⁹⁰⁾申⁽⁹¹⁾樣⁽⁹²⁾、縱雖⁽⁹³⁾須⁽⁹⁴⁾彌鐵圍山⁽⁹⁵⁾、峯⁽⁹⁶⁾聞⁽⁹⁷⁾有⁽⁹⁸⁾法花經⁽⁹⁹⁾、爭⁽¹⁰⁰⁾不⁽¹⁰¹⁾尋⁽¹⁰²⁾之縱雖⁽¹⁰³⁾、蓬萊混崙山⁽¹⁰⁴⁾、洞⁽¹⁰⁵⁾傳⁽¹⁰⁶⁾有⁽¹⁰⁷⁾一⁽¹⁰⁸⁾妙典⁽¹⁰⁹⁾、何不⁽¹¹⁰⁾求⁽¹¹¹⁾之況⁽¹¹²⁾我君⁽¹¹³⁾依⁽¹¹⁴⁾勸⁽¹¹⁵⁾命⁽¹¹⁶⁾趣⁽¹¹⁷⁾衡州⁽¹¹⁸⁾、國⁽¹¹⁹⁾先生⁽¹²⁰⁾持經⁽¹²¹⁾於⁽¹²²⁾奉⁽¹²³⁾迎者⁽¹²⁴⁾二聖⁽¹²⁵⁾、二十⁽¹²⁶⁾羅刹女⁽¹²⁷⁾必擁護⁽¹²⁸⁾給⁽¹²⁹⁾而⁽¹³⁰⁾御願⁽¹³¹⁾不⁽¹³²⁾可⁽¹³³⁾有⁽¹³⁴⁾相違⁽¹³⁵⁾、被⁽¹³⁶⁾申⁽¹³⁷⁾太子⁽¹³⁸⁾悅思⁽¹³⁹⁾食⁽¹⁴⁰⁾、先生⁽¹⁴¹⁾御道具⁽¹⁴²⁾等⁽¹⁴³⁾目録⁽¹⁴⁴⁾遊⁽¹⁴⁵⁾與⁽¹⁴⁶⁾大臣⁽¹⁴⁷⁾相構⁽¹⁴⁸⁾員數⁽¹⁴⁹⁾不⁽¹⁵⁰⁾違⁽¹⁵¹⁾、隨⁽¹⁵²⁾請⁽¹⁵³⁾取⁽¹⁵⁴⁾可⁽¹⁵⁵⁾將⁽¹⁵⁶⁾束⁽¹⁵⁷⁾勸⁽¹⁵⁸⁾給⁽¹⁵⁹⁾、御使⁽¹⁶⁰⁾既⁽¹⁶¹⁾下⁽¹⁶²⁾向⁽¹⁶³⁾鎮西⁽¹⁶⁴⁾、衡州⁽¹⁶⁵⁾國⁽¹⁶⁶⁾被⁽¹⁶⁷⁾渡⁽¹⁶⁸⁾唐船⁽¹⁶⁹⁾有⁽¹⁷⁰⁾樣⁽¹⁷¹⁾是也⁽¹⁷²⁾、太子⁽¹⁷³⁾如⁽¹⁷⁴⁾御教⁽¹⁷⁵⁾一日⁽¹⁷⁶⁾

本國中⁽¹⁷⁷⁾靈神⁽¹⁷⁸⁾一百三十余社⁽¹⁷⁹⁾、船中⁽¹⁸⁰⁾奉⁽¹⁸¹⁾勸⁽¹⁸²⁾請⁽¹⁸³⁾立⁽¹⁸⁴⁾鳥居⁽¹⁸⁵⁾、鉾⁽¹⁸⁶⁾、ミテクラ⁽¹⁸⁷⁾ヲ立⁽¹⁸⁸⁾莊⁽¹⁸⁹⁾、抽⁽¹⁹⁰⁾懇志⁽¹⁹¹⁾、無⁽¹⁹²⁾他⁽¹⁹³⁾念⁽¹⁹⁴⁾浪風⁽¹⁹⁵⁾、便⁽¹⁹⁶⁾祈⁽¹⁹⁷⁾請⁽¹⁹⁸⁾、洗⁽¹⁹⁹⁾々⁽²⁰⁰⁾浮⁽²⁰¹⁾海上⁽²⁰²⁾、一⁽²⁰³⁾身⁽²⁰⁴⁾命⁽²⁰⁵⁾不⁽²⁰⁶⁾惜⁽²⁰⁷⁾一⁽²⁰⁸⁾乘⁽²⁰⁹⁾被⁽²¹⁰⁾尋⁽²¹¹⁾

(三十六ノ四)

四

他國⁽²¹²⁾有⁽²¹³⁾樣⁽²¹⁴⁾最⁽²¹⁵⁾最⁽²¹⁶⁾風⁽²¹⁷⁾皓⁽²¹⁸⁾々⁽²¹⁹⁾海⁽²²⁰⁾慢⁽²²¹⁾々⁽²²²⁾、任⁽²²³⁾塩⁽²²⁴⁾隨⁽²²⁵⁾風⁽²²⁶⁾コ⁽²²⁷⁾ギ⁽²²⁸⁾行⁽²²⁹⁾逆浪⁽²³⁰⁾荒⁽²³¹⁾々⁽²³²⁾、東⁽²³³⁾西南⁽²³⁴⁾北⁽²³⁵⁾見⁽²³⁶⁾山⁽²³⁷⁾更⁽²³⁸⁾無⁽²³⁹⁾也⁽²⁴⁰⁾雲海⁽²⁴¹⁾沈⁽²⁴²⁾々⁽²⁴³⁾、海上⁽²⁴⁴⁾日⁽²⁴⁵⁾暮⁽²⁴⁶⁾、唯⁽²⁴⁷⁾日⁽²⁴⁸⁾月⁽²⁴⁹⁾星⁽²⁵⁰⁾宿⁽²⁵¹⁾東⁽²⁵²⁾出⁽²⁵³⁾以⁽²⁵⁴⁾西⁽²⁵⁵⁾轉⁽²⁵⁶⁾弁⁽²⁵⁷⁾二⁽²⁵⁸⁾方⁽²⁵⁹⁾角⁽²⁶⁰⁾、白⁽²⁶¹⁾浪⁽²⁶²⁾二⁽²⁶³⁾千⁽²⁶⁴⁾里⁽²⁶⁵⁾、波⁽²⁶⁶⁾底⁽²⁶⁷⁾沈⁽²⁶⁸⁾々⁽²⁶⁹⁾、身⁽²⁷⁰⁾心⁽²⁷¹⁾懸⁽²⁷²⁾、彼⁽²⁷³⁾般⁽²⁷⁴⁾若⁽²⁷⁵⁾、峯⁽²⁷⁶⁾深⁽²⁷⁷⁾被⁽²⁷⁸⁾求⁽²⁷⁹⁾一⁽²⁸⁰⁾乘⁽²⁸¹⁾、御法⁽²⁸²⁾十⁽²⁸³⁾羅刹女⁽²⁸⁴⁾擁護⁽²⁸⁵⁾二⁽²⁸⁶⁾聖⁽²⁸⁷⁾二⁽²⁸⁸⁾天⁽²⁸⁹⁾隨⁽²⁹⁰⁾逐⁽²⁹¹⁾給⁽²⁹²⁾、七日⁽²⁹³⁾七⁽²⁹⁴⁾夜⁽²⁹⁵⁾之間⁽²⁹⁶⁾五⁽²⁹⁷⁾万⁽²⁹⁸⁾里⁽²⁹⁹⁾之海⁽³⁰⁰⁾上⁽³⁰¹⁾無⁽³⁰²⁾事⁽³⁰³⁾故⁽³⁰⁴⁾コ⁽³⁰⁵⁾ギ⁽³⁰⁶⁾ワ⁽³⁰⁷⁾タ⁽³⁰⁸⁾リ⁽³⁰⁹⁾衡州⁽³¹⁰⁾之津⁽³¹¹⁾被⁽³¹²⁾渡⁽³¹³⁾付⁽³¹⁴⁾ケル⁽³¹⁵⁾也⁽³¹⁶⁾、御使⁽³¹⁷⁾船⁽³¹⁸⁾下⁽³¹⁹⁾土人⁽³²⁰⁾相⁽³²¹⁾尋⁽³²²⁾云⁽³²³⁾抑⁽³²⁴⁾當⁽³²⁵⁾國⁽³²⁶⁾之中⁽³²⁷⁾衡山⁽³²⁸⁾申⁽³²⁹⁾山⁽³³⁰⁾相⁽³³¹⁾當⁽³³²⁾何⁽³³³⁾、方⁽³³⁴⁾角⁽³³⁵⁾侍⁽³³⁶⁾哉⁽³³⁷⁾土人⁽³³⁸⁾答⁽³³⁹⁾申⁽³⁴⁰⁾自⁽³⁴¹⁾此⁽³⁴²⁾津⁽³⁴³⁾相⁽³⁴⁴⁾當⁽³⁴⁵⁾未⁽³⁴⁶⁾申⁽³⁴⁷⁾方⁽³⁴⁸⁾高山⁽³⁴⁹⁾侍⁽³⁵⁰⁾也⁽³⁵¹⁾、陸地⁽³⁵²⁾遠⁽³⁵³⁾從⁽³⁵⁴⁾此⁽³⁵⁵⁾二⁽³⁵⁶⁾千⁽³⁵⁷⁾八⁽³⁵⁸⁾百⁽³⁵⁹⁾三⁽³⁶⁰⁾十⁽³⁶¹⁾余⁽³⁶²⁾里⁽³⁶³⁾也⁽³⁶⁴⁾、答⁽³⁶⁵⁾侍⁽³⁶⁶⁾太子⁽³⁶⁷⁾ノ御⁽³⁶⁸⁾教⁽³⁶⁹⁾付⁽³⁷⁰⁾合⁽³⁷¹⁾セリ⁽³⁷²⁾次⁽³⁷³⁾此⁽³⁷⁴⁾國⁽³⁷⁵⁾王⁽³⁷⁶⁾城⁽³⁷⁷⁾道⁽³⁷⁸⁾遠⁽³⁷⁹⁾被⁽³⁸⁰⁾二⁽³⁸¹⁾相⁽³⁸²⁾尋⁽³⁸³⁾二⁽³⁸⁴⁾七⁽³⁸⁵⁾日⁽³⁸⁶⁾路⁽³⁸⁷⁾侍⁽³⁸⁸⁾答⁽³⁸⁹⁾ケリ⁽³⁹⁰⁾

四十一

御使⁽³⁹¹⁾先⁽³⁹²⁾城⁽³⁹³⁾入⁽³⁹⁴⁾衡州⁽³⁹⁵⁾國⁽³⁹⁶⁾大⁽³⁹⁷⁾王⁽³⁹⁸⁾奏⁽³⁹⁹⁾此⁽⁴⁰⁰⁾由⁽⁴⁰¹⁾蒙⁽⁴⁰²⁾御⁽⁴⁰³⁾許⁽⁴⁰⁴⁾趣⁽⁴⁰⁵⁾衡山⁽⁴⁰⁶⁾妹子⁽⁴⁰⁷⁾大⁽⁴⁰⁸⁾臣⁽⁴⁰⁹⁾如⁽⁴¹⁰⁾太子⁽⁴¹¹⁾御⁽⁴¹²⁾教⁽⁴¹³⁾懸⁽⁴¹⁴⁾江南⁽⁴¹⁵⁾道⁽⁴¹⁶⁾赤⁽⁴¹⁷⁾懸⁽⁴¹⁸⁾南⁽⁴¹⁹⁾被⁽⁴²⁰⁾尋⁽⁴²¹⁾上⁽⁴²²⁾下⁽⁴²³⁾二⁽⁴²⁴⁾百⁽⁴²⁵⁾余⁽⁴²⁶⁾人⁽⁴²⁷⁾供⁽⁴²⁸⁾奉⁽⁴²⁹⁾人⁽⁴³⁰⁾々⁽⁴³¹⁾召⁽⁴³²⁾具⁽⁴³³⁾峯⁽⁴³⁴⁾登⁽⁴³⁵⁾谷⁽⁴³⁶⁾下⁽⁴³⁷⁾過⁽⁴³⁸⁾野⁽⁴³⁹⁾趣⁽⁴⁴⁰⁾山⁽⁴⁴¹⁾步⁽⁴⁴²⁾行⁽⁴⁴³⁾習⁽⁴⁴⁴⁾旅⁽⁴⁴⁵⁾空⁽⁴⁴⁶⁾前⁽⁴⁴⁷⁾途⁽⁴⁴⁸⁾遠⁽⁴⁴⁹⁾往⁽⁴⁵⁰⁾來⁽⁴⁵¹⁾客⁽⁴⁵²⁾希⁽⁴⁵³⁾道⁽⁴⁵⁴⁾可⁽⁴⁵⁵⁾問⁽⁴⁵⁶⁾

四十

人無鳥獸音 自不_レ音信_二日光雲絶間導_一 重_二多_一日
數_二被_一尋_二上_一般若_二峯程近四十余里松原致_一 青乱
並稍行々相當_二松風靜々々細_一 彼自_二松原_一南四五
里計被_レ過即般若峯_二上_一實太子御教旨一言_二
無_二相違_一サテモ彼山峨々峙_二十萬八千丈之高山也_一
白雲谷見下及_二半天_一梵天切利雲手可_レ取心地
此峯五峯隨一雲上高峙出_二東西南北遠暗_一四方

(三十六ノ五)

調望心言不_レ及_レ乍_レ生々天得果之心地セリ

御使寺通_二案内_一少沙弥一人出来_二御使未_一名乘_二
躍_一上悦云 喜哉吾師匠_二先師合_一禪法師御使只

今此来_二哀_一事共哉書長給_一ヘル 御記文既付合_二

寺走返此由云告_二師匠等_一自_二寺中_一三人老僧立

出給_二へり額_一四海浪々ミ眉八字霜タレテ懸_二鳩杖_一老
々立並御使打見各流_二涙給_一へり

抑吾身東海日本國者也此御寺般若臺申有_二

別院_二被_一申老僧達無_二左右_一聞知事無_二御使思樣_一

無_二通人_一互_二不可_一知_二詞但文字昔彼國_一造出渡_二日本_一

物_二其意可_一通思_二俄墨筆尋_一不能跪_二庭上_一白州上

四十一ウ

舒_二右手指_一書_二狀曰_一

吾是從_レ此東海過_二數千萬里_一大日本國秋津嶋

之者也彼國聖人出世給_二へり先生_一當國中住_二此

御寺_二給_一人也今我國奉_二名_一聖德太子_二日本人

王始_二三十二代_一用明天皇申_二帝王子_一今年卅六

成給_二へり一向崇_一貴仏法_二自作_一諸經義疏_二給_一故昔

此御寺_二取_一三_二持_一法花經_二罷渡_一御使侍小野妹子

大臣申者也_二被_一書_二

三人老僧見_二此文_一上_レ音感嗥流_二涙云_一

抑一大三千世界廣何處カ_二ルタメシ_一侍ルヘキ二生之本

師御使并御手跡_二給_一事難_二有覺_一莫不_レ思_二分_一回

四十二オ

(三十六ノ六)

昔御入滅之時自記文給_二へり吾遷化之後經_二三十七

年_二取_一持經_二可_一遣_二使約束_一給_二へり今年既相_一當_二其年記_一

喜哉我等今年_二存命_一御使今々_二相_一御記文無_二相

違_二只今御使来_一二生_一御手跡奉_二見斗難_一有各御使

袂取スカリ乱_二威儀_一泣悲給_二へり中一人老僧殊_一歎悲云

哀吾本師昔住_二此山_一給時常_二好_一持_二少宗法花經_一給_二日本

云少國生給_二事_一悲給_二へり其後太子_一取_二送給_一三具法服

三御消息等_二開_一箱吾々名字見知_二請取_一各面々_二捧持_一

云給リ實哀事共哉我等本師二生々賛給御手跡
更昔不替給先生此寺書貴給ヘル文字少賛不思議
太子遊貴給ヘル御手跡共取出比校御使令見給ヘリ

四十三ウ

其後各向ニ東方日本國一展ニ座具焼香太子三度奉拜
開ニ御消息ニ讀給ヘリ

然後遣ニ少沙弥ニ從ニ彼般若臺ニ以北岩屋內先生
御具足共取寄任ニ目錄之旨ニ御使一一是讀渡給ヘリ

其後御使寺內相具入委令拜給ヘリ

○抑日本聖德太子先生住ニ此寺ニ給時彼住給是居給処也

書置給筆跡留ニ此壁ニ殘ニ彼障子ニ如レ斯多生古筆跡
並空名字雖留ニ此寺ニ主去再不返給各声不惜泣

悲給ヘリ御使親太子多生聖跡奉見肝藥

絶腹夢覺無思分方其後又三人老僧御使相

具寺外立出共差ニ東西南北告御使言阿南上

四十三ウ

(三十六ノセ)

エ

檀見僧坊太子先生常住給般若臺申禪坊松木

造名松室其後三基石塔婆見聖德太子過去三

生之御基所御坐彼佛殿傍客殿桂木造侍桂殿

申侍其後見三基石塔侍同太子過去三生御基

可御坐適去六生御墓所等悲多生間朝基住給

舊室聖跡空如レ斯雖殘留主逝去無主成樓哀隨

告ニ生國一給ヘリ影傾西山ニ余命不幾與御使共

昔本師不奉見御使サヘ已返去ナントストテ三人

老僧殊流渡悲給自余之數千人衆僧鳴ニ

金大鼓打廊下立並焼香散花太子多生御

本尊持經等奉供養面々惜名殘門外奉送

四十四オ

給也御使衡州津被ニ下付衡州國大王昔當

國成ニ大利益給生身觀音靈應日本國再誕

給尤音信可申是十二人臣下奉御使給

彼船便船彼船同年九月皈朝鎮西羽方

津付御使以早馬城事子細被申太子悅

思食大國十二人大臣遣錯馬七十五足

上給ヘリ

御使妹子大臣上洛先生御具足共是悉

奉太子給處是也太子種々御道具中

先法花經入給開經之箱有御拜見御

氣色忽替佛歎深御鉢也抑是朕非先

四十四ウ

生持經^ニ第子^ニ有僧持經也彼僧依^{ヘテ}過去宿業^ニ念誦讀經同法^{（4）}々談之^ニ砌^ニ常垂眠^{セシ}間時人則名^ニ垂眠比丘^ニ冬^ニ天^ニ火邊^ニ開^ニ此經^ニ讀時例居眠此經四卷中文字二飛^{（ホ）}火燒御經也各是可^ニ拜見^ニ近從之人^ニ開^ニ是令^ニ見給^ニ誠四卷五百第子品之中橋陳女比丘僧終歡喜未曾有有文字其不在此會會文字此二字火燒御經也

次三人御第子老僧開^ニ送文^ニ御覽蜜遊落涙二千行ナキアヘ給ワス御一見之後

引破火燒送給ケル也

太子三十六之御歳以^{（42）}妹子大臣所

奉^{（43）}迎法花経末代至^レ今納^ニ法隆寺^ニ給ヘリ転記

正法輪藏三十六卷

四十五オ

釋專空

四十五ウ以下白

- (1) 「弘」は「弥」の上に重ね書。
- (2) 「可」の下、胡粉で「背」を消す。
- (3) 「以」の下、胡粉で「已」を消す。
- (4) 「ヲ」は、「シ」の上に重ね書。
- (5) 「般」は、「船」の上に重ね書。
- (6) 「吾」の下、胡粉で「住」を消す。
- (7) 「取」の右に「云」と朱書。
- (8) 「移」の右に「享」と朱書。
- (9) 「同」の「ク」を墨で消す。
- (10) 「盡」の「皿」の部分「囧」と朱で訂し、右に「エカキ字」と朱書。
- (11) 「門」の下、胡粉で「間」を消す。
- (12) 「與」は「興」の上に重ね書。
- (13) 「ヘリ」は、「シ」の上に重ね書。
- (14) 「渡」と「唐」の間左、胡粉で「二」点を消す。
- (15) 「人」の下、胡粉で「民」を消す。
- (16) 「趣」の左肩、胡粉で朱「。」点を消し、右の振り仮名「オモムキ」の下、胡粉で「コヘ」を消す。また欄外にも、胡粉で「越」の朱書を消す。
- (17) 「三」は、「ノ」の上に重ね書。
- (18) 「舍」の左肩に朱「。」を記し、行上欄外に「念」と朱書。
- (19) 「長」の左肩に朱「。」を記し、行上欄外に「置カ」と朱書。また「置」の上にも胡粉で消した様子があるも不明。
- (20) 「互」の下、胡粉で字を消すも不明。また「互」の左肩、胡粉で朱「。」を消す。欄外に「定」「連」の朱書を胡粉で消す。
- (21) 「ス」は、「シ」の上に重ね書。
- (22) 「追」の左肩朱点を記し、右に「過」と朱書。
- (23) 「レル」は、「リ」の上に重ね書。

- (24) 「跡」は、「路」の上に重ね書。
(25) 「記」の左肩に朱点を記し、欄外下に「忌カ」と朱書。
(26) 「使」の下、胡粉で「入」を消す。
(27) 「使」の右下、胡粉で「ヒニ」の送り仮名を消す。
(28) 「斗」の左に朱点を記し、右に「吏カ」と朱書。
(29) 「少」の左肩に朱点を記し、右に「妙カ」と朱書。
(30) 「方」と「日」との間、胡粉で「ニ」の送り仮名と、「一」点とを消す。

- (31) 「北」の下、胡粉で「少」を消す。
(32) 「ノ」は、「ニ」の上に重ね書。
(33) 「ウシロニ」の「ニ」は、「ノ」の上に重ね書。
(34) 「侍」の下、胡粉で「也」を消す。
(35) 「見」の左下、胡粉で「ニ」点を消す。
(36) 「基」の左肩、朱「。」を記し、行上欄外に「暮カ」と朱書。
(37) 「立」の左下、胡粉で「ニ」点を消す。
(38) 「應」の左肩、朱「。」を記し、行上欄外に「像カ」と朱書。
(39) 「之」の下、胡粉で「々」を消す。
(40) 「佛」から左へ細線を出し、「御カ」と朱書。
(41) 「法」の右「朋カ」と朱書。
(42) 「歳」の下、胡粉で「年」を消す。
(43) 「レ」点は「ニ」点の上に重ね書。

*1 順故も書写時、判読できなかったもののようで、草書で
る。あるいは「挑」か。

*2 同前。 ㇿ

(四十七ノ初下) 是太子四十七之御歳

年号倭京三年^{成實次}秋九月御陵造畢侍御大工
陵守參^ア太子之宮^ニ奉^リ奏^{ケル}侍^ニ様殿下ノ如^ニ御勅定^一
御陵今年五歳之間悉造畢仕侍^ニ成^メ御出^ニ可^一
有^レ叙^也稅^一依^レ之太子御陵爲^ニ御稅^一成^ニ行詣^一給^ル御
躰是也 后王子達皆悉奉^ニ引具^一給^ル供奉

人々調^ニ色節^一常御出行詣^ニ替^一是御葬送之義
式兼人々教知給^ル哀^ニ御行ナリケル也

太子御入滅之宮大和國今法隆寺ノ東從^ニ
夢殿^ニ南葦垣宮也此時行詣葦垣之宮^ニ出立^一
御坐山越五里之間成^ニ御行^一給^ル也

彼御陵行詣之尋^レ比^一者秋已爲^レ暮^一九月下旬
之更也サラスタニ暮行秋悲^ニ山色野邊草^一含^ニ
悲色^一鹿音虫声々愁深有様時折カラニ哀也

御共人々は太子最後之御葬礼之義式也
奉^レ思^ル願^ニ各々悲歎之色^一太子御最後思食入
給道スカラ處々御興押^ニ東西南北^一徼覽^ニ哀^一
更共多示給^ル万人承^レ催^ニ哀流^一別離之涙^ニ侍^一
時雨ヌル、袖上涙露給^ル副峯紅葉靜^ニ松栢^一錦

張四方落葉散石上埋道風颯々身辛心消然痛
御與前後供奉上下靜調次第之義式成御行給
尋道次自葦垣宮龍田山東定南差西路成行

四十六

(四十七ノ三)

詣給密路山打越河内國科長里付給御陵

聖道門三遍廻義者五波羅蜜三雜義百代却執行心也

三遍廻給是大行道御心也

淨土真宗ハ如来頼一念之時不可思議德ヲ得カ故

其後御陵御前御興下給御陵造召大工勅給ヘリ

法花經ニ一念信解功德勝八十萬億那由他劫行五波羅蜜
勝鬘經云乃至一念信解功德於恒沙劫行六波羅蜜以是功德比前功德百千
萬億分不及其一已上然法花勝鬘無上ハ

抑汝御陵土臺其跡懸神妙仕方一町余大路切廻云

大經其有得聞彼仏名号觀喜踊躍乃至一念當知此人為得大利則是具足无上功德已上
亦功德勝依法花勝鬘易行也為勝鬘難行念佛易行也

一御葬礼之時為大行道一亦吾子孫相續後世

○平等覺經十方三世仏一切諸菩薩八万諸聖教皆是阿——陀經陀字

不レ可レ繼其表示陵山不レ連後深大路切廻侍者也

○大師釈云自余衆行雖名是善若此念仏者全非比較也
五會讚夫如説教廣略

隨根終飯三末相然念仏三昧是真无上染妙門如來常於三昧海中舉細々

四十七

淨勝寺丹山文庫蔵「正法輪蔵」研究並びに翻刻

干若易語易證真唯淨土教門也已上
時御大工段申様夫人問之習以男女女子被訪
没後才一爲寶何我君多王子後世無御讓共空
可成給之由勅給哉

太子詔云夫死子少賢遺教以無子為不孝云ヘリ
吾釈迦大聖御弟子也豈無子為歟哉哀我已此
世機緣盡父母所生肉身留量此岩屋內契
慈尊三會曉送五十六億七千萬歳春秋可
レ引導衆生二砌也勅給

后王子達奉レ始万人流涙御袖ヌラシ給ヘリ哀ナリ
ケル御更共也太子御一期之本地垂跡之利生
結決句文給身林沙染御筆岩屋之内立石

四十七

(四十七ノ三)

壁書注給ヘリ碑文言

大慈大悲本誓願 愍念衆生如一子

是故方便從西方 誕生片州興正法

我身救世觀世音 定慧契女大勢至也

生育我身大悲母

西方教主弥陀尊

真如真實本一鉢

一三五

一跡、現レ三同一身、片域化縁亦已盡
還歸西方、我淨土、爲度末世諸衆生、
父母所生、西肉身、遺留勝地、此廟咽
三骨一廟三尊位、過去七佛法輪可

大乘相應功德地、一度參詣、離惡趣、
決定往生極樂界、

然弘法大師御記文云

嗟我天皇御宇弘仁元年以河内國靈處建
立道場、卜三籠居處之間參詣、上宮聖靈御廟、
百箇日第九十六日之夜半有二靈建御廟、
洞之内有二微妙之音、誦大般若理趣分、應音、
有光爰空海祈念、此妙、更誰者可現、哉願示、
我應、誓願、廟咽之前有二光明輪、光中微妙音、
唱云、我身救世大悲之垂跡也、我昔於安養
世界爲利益、此土之衆生捨彼安樂、來此穢

(四十七ノ四丁)

土、我母后是我大師無量壽如來化身垂
跡也、三尊結契受生於和國、施化於日
域、遷化年久擬彼三尊之位、並三骨於一廟、

四十八オ

然後忽然光明、中現彌陀三尊之像、有妙
音、誦法花勝鬘經等之大乘之要文、依見
佛聞法之力、空海證得第三發光地、已畢
夫以、西土之三尊者垂權跡於馬臺、東家
之四輩成菩提於安樂、誦靈廟輩成思念
於九品之淨刹、望往生於安樂寶土矣

干時弘仁元年秋八月十五日半夜初時

沙門遍照金剛記注之

四十九オ

推古天皇

日々六万遍念佛ナサレタ

目セイニ云

日々ニ六ノ万ノ弥陀タノム御手ニ入ヌル心ウレシキ

妃水ヲコヒ玉フ時

太子自セイノ

イカルカノトミノ井ノ水イカナクニタエテシモノヲ

トミノ井ノ水御年五十才二月廿一日夜

妃ノ云

イカルカノトミノ井ノ水スクヒテシアミノ目ヨリソモレ出ニケリ
カキリナク思フナミタニソボチヌルソテハカワカジアワン日マテモ

四十九オ

(四十七ノ五丁終)

シタラヒノミチハカタ／＼ワカルヒユキメクリテハアワントソ思フ

太子御歌

濁深^{キキ}浮世中ノワスレ水イカ、ワ君ニイマス、ムヘキ

妃ノ云返

ヨシサラハ五濁ノ水ハノマスヒイサカヘリナン弥陀^{ミツダ}御國ヘ

太子云

極樂ニ今カヘル也世中ニマヨエル人ノ道チシルヘシテ

妃返

諸共我^{ウチ}モシルヘノ道ナレハヲナシウテナノ花ヲ⁽²⁶⁾ミントワ

大國^{オホクニ}便高表仁来 建豊浦寺^{テンポウボウジ}儀付云

カツラキヤトヨラノ寺ノアキノ月西ニナルマテカケヲコソミレ

五十オ

(五十ウ白)

- (1) 「畢」の右下、胡粉で送り仮名「ヌ」を消す。
- (2) 「二」点の上に、「レ」点を朱で重ね書。
- (3) 「人」の下、胡粉で「々」を消す。
- (4) 「ケル」は、「ナ」に重ね書。
- (5) 「御」の下、胡粉で「行」を消す。
- (6) 「レ」点の下、胡粉で字を消すも不明。
- (7) 「秋」の下、胡粉で字を消すも不明。
- (8) 「葦」から左へ線を出し、「法隆寺ノタツミニ當テ二亘伝村今ニアリ」

と墨書し、「亘」の右に「カキ」と朱書。

- (9) 「行」の下、胡粉で字を消すも不明。
- (10) 「干」の下、胡粉で「亥」を消す。
- (11) 「染」のつくり「ワ」冠を朱書。「深」とする。
- (12) 「死」の左に朱点を記し、右に「孔」と朱書。
- (13) 「量」を朱線でミセケチにし、右に「置」を朱書。
- (14) 「決」の右に「サイ」と朱書。
- (15) 「西」を朱線でミセケチにし、右に「血」と朱書。
- (16) 「仁」の下、胡粉で「極」を消す。
- (17) 「之」と「音」の間に朱点を記し、右に「少^イ」と朱書。
- (18) 「有」の下、胡粉で「光」を消す。
- (19) 「海」の左下、胡粉で「ニ」点を消す。
- (20) 「四」の下、胡粉で「輩」を消す。
- (21) 「タ」の下に続けて、「ル^イ」と朱書。
- (22) 「ト」の右から、胡粉で「トミノ井ノ水ノ心ハ世ヲスクフ^イ」と朱書せるを消す。
- (23) 「ト」の右から、「トミノ井ノ水ノ心ハ世ヲスクフ^イ」と朱書。
- (24) 「リ」の右に、「ル^イ」と朱書。
- (25) 「ワ」は、「ハ」に重ね書。
- (26) 「ミントワ」のそれぞれの左に朱点を記し、「ミ」から右に朱線を出し、「ナカメンカ」と朱書。
- (27) 「高」の左に「佛事云「来ル」と墨書し、「事」の左に朱「。」を記し、行下に「。師カ」と朱書。

(四十八ノ初丁)

是太子四十八御歳⁽¹⁾

年号倭京四年⁽²⁾ 己卯 春之比近江國ノ國司近

江臣持⁽³⁾異形物⁽⁴⁾太子御前參奉奏樣

夫近日⁽⁵⁾蒲生河異形物俄出來侍⁽⁶⁾其形如

人非⁽⁷⁾人又如⁽⁸⁾魚非⁽⁹⁾魚四午足侍⁽¹⁰⁾於一身⁽¹¹⁾備⁽¹²⁾

多畜類之軀⁽¹³⁾世間人更是不⁽¹⁴⁾弁⁽¹⁵⁾知⁽¹⁶⁾君定⁽¹⁷⁾御

知食侍⁽¹⁸⁾櫬爲⁽¹⁹⁾備⁽²⁰⁾上⁽²¹⁾櫬⁽²²⁾持參仕持⁽²³⁾奏

其時太子南殿成⁽²⁴⁾出⁽²⁵⁾御差御指告近江大

臣御并御前之人々勅給⁽²⁶⁾抑此異形者

五色人魚者是也此爲朝家守失賢臣時

出現者也賢臣滅時天地顯二瑞物恠虚

空飛免翔天金色免出現大地又五色人魚

必出來者也 賢王御代⁽²⁷⁾麒麟鳳凰等之靈

鳥世間出現增⁽²⁸⁾天長地久壽筭⁽²⁹⁾二者也此五色

人魚者國禍始物也吾入滅後⁽³⁰⁾誰弁⁽³¹⁾知⁽³²⁾之急

早々城外可⁽³³⁾拂失⁽³⁴⁾近江水海被⁽³⁵⁾放⁽³⁶⁾也是太子

御入滅物恠始⁽³⁷⁾其外物恠天變世間無⁽³⁸⁾間諸

人仰天驚⁽³⁹⁾耳目⁽⁴⁰⁾事⁽⁴¹⁾タキ

同歳二月大星從⁽⁴²⁾東流⁽⁴³⁾西其光照⁽⁴⁴⁾二天⁽⁴⁵⁾移⁽⁴⁶⁾時

五十一オ

尅久不⁽⁴⁷⁾消其⁽⁴⁸⁾声亦如⁽⁴⁹⁾雷電⁽⁵⁰⁾響⁽⁵¹⁾虚空⁽⁵²⁾諸人驚⁽⁵³⁾耳
目⁽⁵⁴⁾身毛弥立然⁽⁵⁵⁾後又虚空無⁽⁵⁶⁾雲雨⁽⁵⁷⁾客星飛⁽⁵⁸⁾
虚空⁽⁵⁹⁾入⁽⁶⁰⁾三月宮⁽⁶¹⁾成⁽⁶²⁾大旱跋之難⁽⁶³⁾

(四十八ノ三丁)

同三月八日東方⁽⁶⁴⁾五色雲從⁽⁶⁵⁾夕來覆⁽⁶⁶⁾太子御

殿上⁽⁶⁷⁾薨⁽⁶⁸⁾連⁽⁶⁹⁾天久不⁽⁷⁰⁾消 又其軀⁽⁷¹⁾名字⁽⁷²⁾不⁽⁷³⁾知鳥

共自⁽⁷⁴⁾四方⁽⁷⁵⁾飛來悲鳴御殿上⁽⁷⁶⁾東西南北飛懸⁽⁷⁷⁾終

皆差⁽⁷⁸⁾東方⁽⁷⁹⁾飛去⁽⁸⁰⁾同歳秋之比⁽⁸¹⁾河内國茨田池

水始⁽⁸²⁾諸國池水色皆變成⁽⁸³⁾三色⁽⁸⁴⁾成⁽⁸⁵⁾紺色⁽⁸⁶⁾侍⁽⁸⁷⁾一切

江河大海之大小魚共悉死⁽⁸⁸⁾標⁽⁸⁹⁾浪浮⁽⁹⁰⁾水侍⁽⁹¹⁾

加之諸國山野鳥獸⁽⁹²⁾皆悉泣悲侍⁽⁹³⁾如斯一切

魚鳥思⁽⁹⁴⁾知太子恩德⁽⁹⁵⁾兼思死⁽⁹⁶⁾也 夫一切畜類

思⁽⁹⁷⁾子悲⁽⁹⁸⁾親心親首慈悲也惜⁽⁹⁹⁾命恐⁽¹⁰⁰⁾人心亦文殊

智慧也然間彼鳥獸思⁽¹⁰¹⁾知太子恩德⁽¹⁰²⁾侍事中

々勝⁽¹⁰³⁾人輪⁽¹⁰⁴⁾侍故諸國池河水色⁽¹⁰⁵⁾顯⁽¹⁰⁶⁾死⁽¹⁰⁷⁾色⁽¹⁰⁸⁾其色

贊⁽¹⁰⁹⁾味變⁽¹¹⁰⁾一切草木顯⁽¹¹¹⁾悲色⁽¹¹²⁾

釋尊御入滅之瑞相以如是跋提河漫々⁽¹¹³⁾流忽

盡⁽¹¹⁴⁾流岸打浪止⁽¹¹⁵⁾音顯⁽¹¹⁶⁾會者定離之無常⁽¹¹⁷⁾四雙

樹連⁽¹¹⁸⁾枝乾⁽¹¹⁹⁾華萎⁽¹²⁰⁾示⁽¹²¹⁾生者必滅之理⁽¹²²⁾侍⁽¹²³⁾遠尋⁽¹²⁴⁾

五十一ウ

五十二オ

天竺釈尊入滅舊義、近訪我朝聖德太子御入滅瑞相、五十二類之獸不限日域、至畜類一切草木樹林、皆顯敷色侍也

(14) 同歲秋八月之比推古天皇太子御夢語、シ

給へり夫朕去夜夢見侍太子自例容顏嚴

召錦御衣、遠他所可有御出儀見エサセ給ツルハ何

様御相ニヤト太子勅答申給、是臣已一期機

(四十八ノ三)

縁空盡畢本地古郷可罷販無常之相侍也

夫治古郷錦飯云夏侍臣古郷者西方之極樂

淨土也此世機縁盡者可販本土御夢相也

咽御涙給自上一人至三下万民イツシカ生者必滅

會者定離之理御歎有御有様也

太子四十八之御歳如期御入滅之相世間

多出現御遷化近付給、膳后過去六生弘法

利益之御事委御物語シ給へり

抑君我結夫妻之契、五百生深契也后隔生

即妄生々世々之御事已妄給朕生々世々

憶持不妄之徳、一更先生之事共妄不侍

五十二ツ

吾昔釋尊在世靈山瞻衆侍間親蒙如来之遺勅、今無佛世界爲大導師天竺機縁盡如来滅後一千年之比震旦國始化来

王城西始建立白馬寺云大伽藍崇釈尊

一代説教、然後衡山般若峯居住過去經

六生弘佛法侍是震旦最初第一生也、始生、
竺終示震旦故六生、
之曰入之者也

第二生、生衡州王宮、秦文帝之十善儲君

被崇侍未即位、生年十七歳、忽發心出家住

衡山之峯弘佛法、亦五十余年也

第三生、又託生劉氏家、五岳道士成長者

(四十八ノ四丁終)

文道才藝普弘震旦、生年廿三。世間轉變

無常、忽出家亦住、彼衡山峯、壽限五十九

歳遷化

第四生、相繼梁世得梁家之天子位、我成

万乘之主侍、生年廿五、發心出家、又住、彼

衡山佛法勤行、壽限六十七、入滅

第五生、又我魂生梁相云人家、群臣位文

五十三オ

武兩藝普震旦人教然後卅五^ニ發心出家住^ニ彼山^ニ勤行佛法^ニ六十一歳

五十四才
以下白
(五十四ウ白)

- (1) 「御」の下、胡粉で「歳」を消す。
- (2) 「蒲」の右肩に朱「。」を記し、行上欄外に「蒲^々」と朱書。
- (3) 「午」の第一画に朱筆を加え、「手」と訂す。
- (4) 「類」の下、胡粉で「生」を消す。
- (5) 「世」の下、胡粉で「也」を消す。
- (6) 「麒」の右肩に朱「。」を記し、行上欄外に「麒^々」と朱書。
- (7) 「麟」の右肩に朱「。」を記し、行上欄外に「麟^々」と朱書。
- (8) 「ハタ」の左に朱点を二つ記し、行下に「多^々」と朱書。
- (9) 「從」の下、胡粉で字を消すも不明。
- (10) 「驚」は何かの字の上に重ね書きするも不明。
- (11) 「面」の右肩に朱「。」を記し、行上欄外に「血^々」と朱書。
- (12) 「侍」は「持」の上に重ね書。
- (13) 「輪」の右肩に朱「。」を記し、行上欄外に「倫^々」と朱書。
- (14) 「歳」の下、胡粉で「八」を消す。
- (15) 「錦」の下、胡粉で字を消すも不明。
- (16) 「妄」の下、胡粉で字を消すも不明。
- (17) 「経」の下、胡粉で「六」を消す。
- (18) 「余」の下、胡粉で「四」を消す。

*1 他本を検するに、本来こは「簪」であつたものがいずれかの転写時に二字として写されたものであらう。

右斯書者聖德太子御繪傳八幅
之繪詞傳也聖人御製作といへ共
文章の跡也高田專修寺三代目
專空の作か三十六才之下^ニ此名あり
聖人之御製選ならば自身の此名
有憚是專空作のしるしなり

北越丹生郡糸生村
淨勝寺順故

五十五才
(五十五ウ白)